

太田遺跡 緊急発掘調査報告書
茅御堂遺跡

—— 長野県上田市 ——

1975年3月

上田市教育委員会
長野県東信土地改良事務所

20

203

10-2

序にかえて

上田市教育長 山 極 真 平

太田遺跡、茅御堂遺跡は神川の河成段丘上に位置し、特に太田遺跡は、上田市が行った埋蔵文化財分布調査によって遺跡包蔵の可能性が認められた経過をもってありますが、このたび、東信土地改良事務所の手によって洩間山麓農道が建設されることになりまして、その通道地域における埋蔵文化財の記録による保存の必要に迫られたのであります。

上田市教育委員会は県教育委員会の指導を得まして、東信土地改良事務所と協議のうえ、当該工事に先だって発掘調査をすることになりました。調査は、この区域がたまたま水田であった事から秋の取入れのすんだ11月2日から11日まで行なわれ上田市文化財調査委員の小林幹男先生に主任調査員をお願いしました。時おり吹きぬけ 神川の寒風のなかで初冬の弱い日ざしを浴びながら調査は熱意をもって行なわれ、予想以上の学術的な成果をおさめることができたのであります。

これまで誰の眼にも触れることもなく、ひっそりと地下に眠っていた文化財が黒々とした土を付着させながら顕現するとき、遠い歴史の流れをへだてた現代に呼吸するような不思議さに胸うたれました。こうした感動を将来にわたって伝えてゆく重要性を感じながら、保存事業の一環である発掘調査がまさに終了したのであります。そして埋蔵文化財をはじめとする多くの文化財を破壊から守ってゆくという私たち子孫に対する責任と使命をいよいよ再認識したのであります。

おわりに、この調査に対して終始ご熱心にとりくまれた小林先生をはじめ諸先生、またあたたかい協力をいただいた地元林之郷自治会の皆さん、東信土地改良事務所の皆さんに対して心から感謝の意を表する次第であります。

昭和50年 3月31日

本文目次

序にかえて 上田市教育委員長 山極 真平	1
例 言	5
第Ⅰ章 発掘調査の経緯と概要	6
1 発掘調査の経過	6
2 調査団の構成	10
3 調査日誌	10
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	13
1 地理的環境	13
2 歴史的環境	14
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	15
I 太田遺跡	15
(1) 第1号住居跡	15
(2) 第2号住居跡	21
(3) 第3号住居跡	24
(4) 第4号住居跡	24
(5) 第5号住居跡	26
(6) 第6号住居跡	27
(7) 第7号住居跡	28
(8) 第8号住居跡	29
(9) 高床状遺構柱穴群	29
2 茅御堂遺跡	30
(1) 第1号住居跡	30
(2) 第2号住居跡	33
(3) 第3号住居跡	36
(4) 第4号竪穴遺構	36
(5) 第5号住居跡	37
(6) 第1号集石跡遺構	37
(7) 第2号集石跡遺構	40
(8) その他の出土遺物	41

第IV章 考 察	42
1 太田遺跡	42
(1) 立地条件と各期の遺構	42
(2) 遺構と遺物	43
2 茅御堂遺跡	44
(1) 遺跡の立地条件	44
(2) 遺構と遺物	44
あとがき	46

図 版 目 次

図版 1 調査前の太田遺跡全景	47
図版 2 発掘調査風景	48
図版 3 太田遺跡全景	49
図版 4 太田遺跡の遺構群	50
図版 5 太田遺跡第1号住居跡と遺物の出土状態	51
図版 6 太田遺跡の地層と遺構	52
図版 7 太田遺跡の遺物出土状態	53
図版 8 太田遺跡の出土遺物1)	54
図版 9 太田遺跡の出土遺物2)	55
図版10 太田遺跡の出土遺物3)	56
図版11 茅御堂遺跡全景	57
図版12 茅御堂遺跡の遺構群	58
図版13 茅御堂遺跡の遺構	59
図版14 茅御堂遺跡の集石跡遺構	60
図版15 茅御堂遺跡の遺物出土状態	61
図版16 茅御堂遺跡の遺物出土状態	62
図版17 茅御堂遺跡出土遺物1)	63
図版18 茅御堂遺跡出土遺物2)	64

挿 図 目 次

第1図	太田遺跡全区	(折り込み)	7
第2図	地層断面図		7
第3図	茅御堂遺跡全区1)		8
第4図	茅御堂遺跡全区2)	(折り込み)	9
第5図	遺跡の立地条件		13
第6図	太田遺跡H-1・2・7号住居跡実測図		16
第7図	太田遺跡H-1号住居跡出土遺物実測図Ⅰ		17
第8図	太田遺跡H-1号住居跡出土遺物実測図Ⅱ		18
第9図	太田遺跡H-1号住居跡出土遺物実測図Ⅲ		19
第10図	太田遺跡H-2号住居跡出土遺物実測図		22
第11図	太田遺跡H-3・4号住居跡実測図		24
第12図	太田遺跡H-3・5・7号住居跡出土遺物実測図		25
第13図	太田遺跡H-5・8号住居跡出土遺物実測図		26
第14図	太田遺跡H-6号住居跡実測図		27
第15図	茅御堂遺跡H-1・5号住居跡実測図		31
第16図	茅御堂遺跡H-1号住居跡出土遺物実測図		32
第17図	茅御堂遺跡H-2・3号住居跡実測図		34
第18図	茅御堂遺跡H-2・3・5号住居跡出土遺物実測図		35
第19図	茅御堂遺跡H-4号竪穴遺構実測図		37
第20図	茅御堂遺跡H-1号集石遺構実測図		38
第21図	茅御堂遺跡H-1号集石遺構出土遺物実測図		39
第22図	茅御堂遺跡H-1・2号集石遺構およびその他の出土遺物実測図		40
第23図	茅御堂遺跡H-2号集石遺構実測図		41

例 言

1 本書は、昭和49年11月2日から11日まで、上田市大字林之郷字太田238番地一6の太田遺跡、および上田市大字漆戸字茅御堂198番地一4の茅御堂遺跡で行なわれた発掘調査、ならびに出土遺物に関する報告書である。

2 本調査は、長野県東信土地改良事務所が行なう「浅間山麓地区広域営農団地農道整備事業」に伴う緊急発掘調査であり、上田市教育委員会が主体となって実施した。

3 出土遺物の整理は、太田遺跡—上田女子短期大学歴史研究会（同大助手塩入秀敏氏指導）、茅御堂遺跡—長野県上田高等学校郷土研究班（同校教諭小野仁志氏指導）の諸君が分担して行ない、小林幹男が全般の調整を担当した。

4 本書の執筆は、各調査員が分担し、各章・節の分担は、およそ下記のとおりである。

第I章 発掘調査の経緯と概要・第II章 遺跡の立地と環境 …………… 小林 幹男

第III章 発見された遺構と遺物

1 太田遺跡 塩入 秀敏 2 茅御堂遺跡 小野 仁志 …………… 小林 幹男

第IV章 考察 …………… 小林 幹男

5 本書の編集は、上田市教育委員会と協議しながら、小林幹男が担当した。

6 本書に使用した実測図、および拓図の調製は、各調査員が分担して行なった。

7 本書の遺構、および出土遺物の整理には、記述を簡略にするため、下記の記号と番号を用い、遺構実測図は60分の1、遺物実測図は3分の1の縮尺とした。

縄文期—J、弥生期—Y、古墳および歴史時代（土師期）—H、須恵器—S。

遺構の整理番号は、発見順に付した。

8 今回の調査には、工事主体である長野県東信土地改良事務所をはじめ、地元の林之郷自治会の皆さんから、あたたかいご協力をいただいた。また、上田市教育委員会文化係の係長平野勝重氏、係の中村明久氏には、連日現地において、周到な準備と調査の円滑な運営のために、多大のご配慮をいただいた。そして、この調査は、秋の多忙な収穫期に行なわれたが、多くの地元の皆さんをはじめ、上田女子短大の大学生・上田染谷丘高・上田高・上田千曲高の高校生諸君が、つねに献身的に協力され、この調査が多大の成果を収めて、無事終了できたのは、これらの多くの皆さんのご努力と協力の賜物である。ここに併せて心から敬意を表し、感謝申し上げるしだいである。

昭和50年1月22日

小林 幹男

第1章 発掘調査の経緯と概要

1 発掘調査の経過

長野県東信土地改良事務所は、上田市など二市三町の農業振興のために、「浅間山麓地区広域営農団地農道整備事業」として、全長2.7kmの大規模農道工事を計画した。

上田市教育委員会では、すでに昭和46年から、上田市全域の埋蔵文化財分布調査を進めてきたが、さらに工事区域内の包蔵地の状態と分布範囲を精査するため、神科地籍から計画路線に沿って、現地を踏査し、太田・西ノ平・茅御堂・井戸田の4遺跡の所在と、分布範囲を確認し、長野県教育委員会文化課の指導の下に、上田市教育委員会が主体となって、

昭和49年11月2日から、およそ10日間の期間に、林之郷の太田遺跡と深戸地籍の茅御堂遺跡（西ノ平遺跡を含む）の緊急発掘調査を実施することにした。

期間の設定は、まず工事区域内の稲の収穫期と、調査団の編成、道路工事の計画などを総合的に判断して決定した。そして、上田市教育委員会では、調査の粗案・具体的計画を作成するために、昭和49年10月24日、社会教育課長と文化係長・係主事・発掘調査担当者、および工事主体である東信土地改良事務所の係員が、現地で協議し、さらに地元の関係者も立会って話し合い、地元自治会と長野県上田染谷丘高等学校歴史班、同上田高等学校郷土研究班、同上田千曲高等学校考古学同好会などの協力を得て、発掘調査を実施することにした。

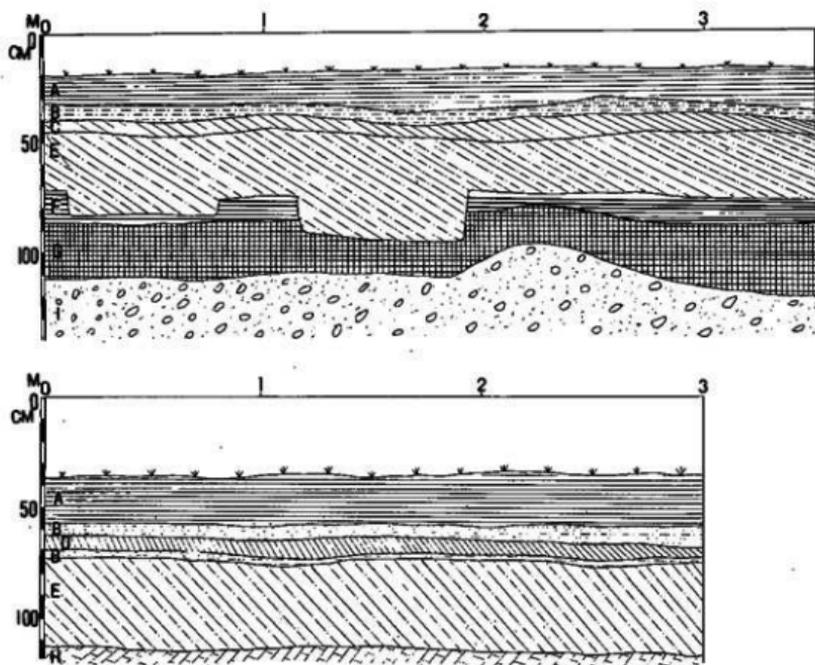
発掘調査は、幸い晴天に恵まれ、また、地元の皆さん、多くの高校生諸君、および上田女子短期大学の大学生諸君など、予期以上の参加者を得て、予想以上に順調に進行し、多大の成果を収めて、昭和49年11月11日に無事終了した。

A 太田遺跡

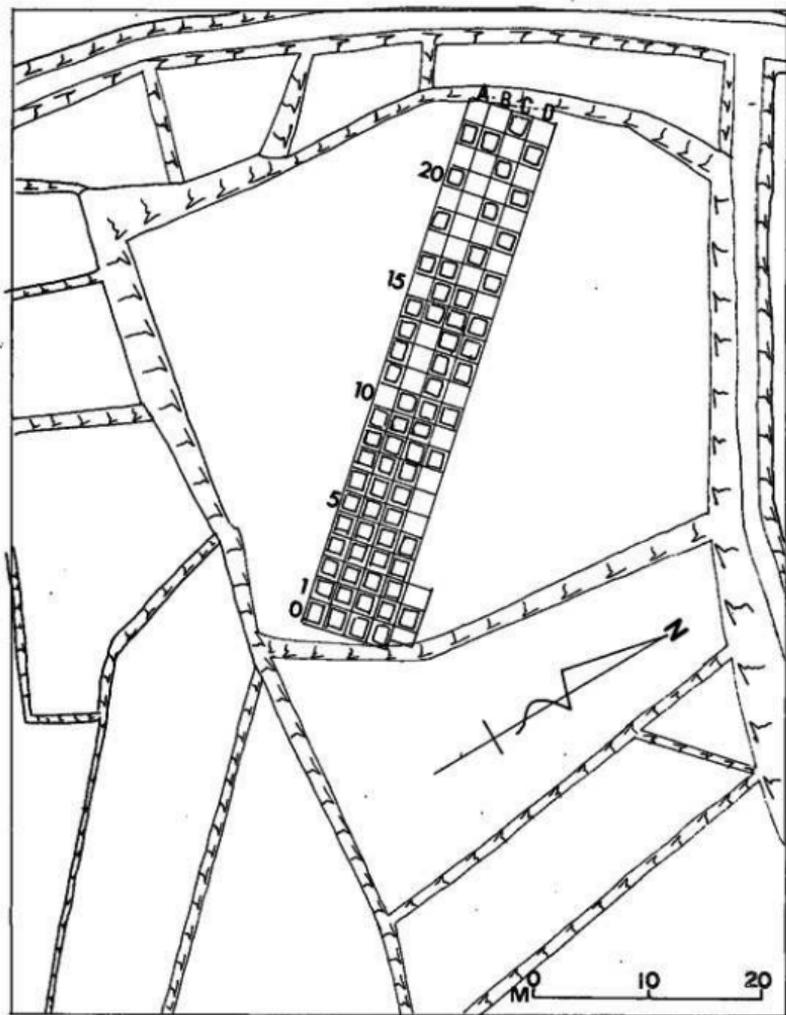
農道の中心線（道路の中心杭と中心杭を結ぶ線）は、およそE S 38°の方向に走っている。本書では、便宜上道路の中心線の方向を東西、これに直交する幅員方向を南北と呼ぶことにする（以下同じ）。

グリッドの設定は、この中心線を基準にして、それぞれ南北へ2m幅に2点（4m）をとり、南より北へA・B・C・Dとし、さらに、中心杭NO131より西方へ6m、神川東岸段丘先端部を原点として、東方へ2m幅に1→33（66m）の点をとって、2m×2mのグリッド132（4×33）、A1→A33、B・C・D各1→33とした。調査は、まずA1より1つとびに着手し、A15を中心にH第1号とH第2号住居跡を検出

した。このため南方へA' 17→19を拡張して、さらにこれらと複合するH第7号住居跡を検出した。また、C・D 20を中心に、H第3号住居跡を検出し、さらにD 19でH第3号住居跡に複合するH第4号住居跡を、D 18を中心にH第5住居跡とこれに複合するH第8号住居跡を検出した。かくして、これらを追求めるため、Dの北方へE 16→20を拡張して、ほぼその全容を知ることができた。H第6号住居跡は、C 15を中心に検出し、B・C Dの15→19付近では、高床状建造物の柱穴と推考される多数のビット群を検出し、H第1号住居跡内からは、多数の完形の坏（土師器・国分期）などを検出した。（第1図・図版5・7）太田遺跡の調査は、このように多大の成果を取めて、11月11日にほぼ終了した。さらに12月28日、地層の断面図を作成するため、道路工事によって深くえぐられた壁面を利用して実測を行ない。また、最後の写真を撮影して、調査を完了した。



第2図 地層断面図(上)太田遺跡南壁面(下)茅御堂遺跡A〇西壁面



第3圖 茶御堂遺跡全圖(1)

遺構群南側部分にあたる道路南壁の地層は、まず15～18cmの耕土(A)の下層に、5～6cmの鉄分の沈澱した溶脱層(B)、更に暗褐色の埴壤土層(C)が5～6cmあり、その下層に30cm前後の黒褐色を呈する砂質の埴土(D)が続き、遺物はすべてこの地層に含まれていた。黒褐色土層の下層には、褐色埴土層(F)が続き、厚さは5～13cm程度、遺構はこの層を掘り割って、さらに下層の黄色砂質土層(G)に達していた(第2図一上・図版6)。

B 茅御堂遺跡

この地籍の道路の中心線は、およそE S 24°の方向に走っている。グリッドの設定は、太田遺跡の場合と同様に、中心線を基準にして、南北双方へ2m幅にそれぞれ2点をとり、南から北へA・B・C・Dとした。東西方向は、+11中心杭を基点にして、東方へ2m幅に23グリッド(46m)をとり、番号は逆に東南隅からA1・A2と西へA23まで、同様にB1→B23、C1→C23、D1→D23をとった(第3図)。

調査は、まずA1を基点として、1つとびに発掘に着手し、C2を中心にH第1号住居跡、A6を中心にH第2号住居跡を検出した。このためA・B・C・D1の東方へA・B・C・D0を拡張し、北方へE0→2を拡張した。また、H第2号住居跡を追求するために、A5→A7を南側へA'5→A'7として拡張した。そして、B0→1とC0→1を中心に第1号集石跡、D0→1とE0→2を中心に第2号集石跡、A1→3を北壁とするH第5号住居跡を検出した。また、H第3号住居跡は、C7を中心に、さらにH第4号竪穴遺構は、C12を中心に検出された(第4図・)。

出土遺物は、第1号集石跡に和泉期の土師器、特に高環が集中的に検出されて、この遺構の性格とともに注目された。前期の遺物は、H第1号住居跡内南壁寄りの覆土、および床面から多量に検出され、また弥生後期箱清水式土器と伴出することが知られた。この地方では柿木遺跡・西光坊遺跡・天神遺跡などでも、同事例があり、更に新たな資料を加えることになった。かくして、茅御堂遺跡の調査は、特に弥生期から土師期(古墳時代)への移行を中心にして、多大な成果を改め、11月11日をもってほぼ終了し、12月28日の地層調査・実測・写真の撮影によって、すべての現地調査を無事完了した。

この地籍の地層は、A0南側の工事溝西壁のプロファイルによれば、耕土層(A)は20～21cm、その下層に鉄分を多く含んだ黄褐色の溶脱層(B)が2層あり、中間の5～6cmの灰褐色埴土層(D)をはさんで、上層が5～6cm、下層が3～5cmであった。包含層は、この下層にあり、黒褐色を呈する埴土層(E)で、厚さ40cm前後と計測された。この下層は、黄褐色の粘土層(F)で、遺構はこの層を掘り割ってつくられていた(第2図一Ⅱ)。

2 調査団の構成

A 工事主体 長野県東信土地改良事務所

B 発掘調査の主体 上田市教育委員会

C 調査団の構成

(1)発掘担当者 小林 幹男 上田市文化財調査委員・長野県上田染谷丘高等学校教諭
(調査主任) ・日本考古学協会会員・上小考古学研究会会長

(2) 調査員 川上 元 上田市立博物館学芸員・日本考古学協会会員・上小考古学研究会会員

岩佐今朝人 東部町立柵津小学校教諭・長野県考古学会委員・上小考古学研究会会員

塩入 秀敏 上田女子短期大学助手・上小考古学研究会会員

小野 仁志 長野県上田高等学校教諭・上小考古学研究会会員

猪熊 啓司 長野県上田千曲高等学校教諭・上小考古学研究会会員

(3)調査補助員 久保田美穂子 上田女子短期大学歴史研究会会員

神津ゆり子 上田女子短期大学歴史研究会会員

阿部 純子 上田女子短期大学歴史研究会会員

柳沢 礼子 上田女子短期大学歴史研究会会員

横沢とも子 上田女子短期大学歴史研究会会員

(4)参加者 林之郷自治会有志

長野県上田染谷丘高等学校歴史班

長野県上田高等学校郷土研究班

長野県上田千曲高等学校考古学同好会

D 調査事務局 上田市教育委員会

3 調査日誌

11月 2日(土) 晴

太田遺跡と茅御堂遺跡のグリッドの設定作業を行ない、西南隅A1より1つとびに発掘調査を開始する。

11月 3日(日) 晴

50余名の参加者によって、茅御堂遺跡の発掘調査を行なう。午前中に18グリッド、午後には29グリッドの発掘を完了し、H第1号住居跡と第1号集石跡・H2号住居跡を検

出する。

11月 4日(月) 曇時々晴

今日から太田遺跡と茅御堂遺跡の2班に分れて、調査を行なう。

茅御堂遺跡では、前日検出した3遺構と第2号集石跡の発掘調査に着手、第1号集石跡は発掘作業を完了して、実測に着手する。他の3遺構は未了。出土遺物は土師器片など2、631片と石錐1、石製有孔円板1・黒曜石屑15などであった。

太田遺跡では、2日の作業を継承して、午前中に11グリッド、午後16グリッドを発掘し、H第1号住居跡を検出する。出土遺物は土師器片など370片であった。

11月 5日(火) 晴

今日は高校生が授業日のため、地元参加者を主力にして、太田遺跡の発掘作業を行なう。夕刻までに14グリッドの発掘を完了して、出土遺物は、土師器片574であった。

11月 6日(水) 晴

前日の作業を継続して、10グリッドを発掘する。出土遺物は土師器片など214であった。

11月 7日(木) 晴

前日の作業を継続する。各グリッドの精査とA'17→19の拡張を行ない、H第2号居跡・H第3号住居跡・H第4号住居跡・H第6号住居跡を検出する。出土遺物は、完形の坏などを含む土師器・須恵器片など246点であった。

11月 8日(金) 晴

本日よりH第1号住居跡・H第3号住居跡・H第6号住居跡の追求を開始する。同時にE16→20の拡張を行ない、各遺構のプランとB・Cの17・18を中心に、柱穴状ビット群を検出する。更に午後よりH第2号住居跡とH第5号住居跡を追求する。出土遺物は、H第1号住居跡内の完形の坏を含む土師器・須恵器・施釉陶器片など2,451点と、H第2号住居跡の35(土師器片など)、H第3号住居跡の177(土師器・須恵器片など)、H第5号住居跡の25(土師器片)、H第6号住居跡の40(土師器片)などであった。

11月9日(土) 曇

本日より高校生が再び参加し、太田遺跡と茅御堂遺跡に分れて作業を行なう。

太田遺跡では、前日の作業を継続し、H第1・2・3・5・6号住居跡の追求と、午後からH第1・2・6号住居跡の実測に着手、H第6号住居跡の実測は完了。出土遺物は、H第1号住居跡220、H第2号住居跡129、H第3号住居跡37で、時期は前日と同期遺物と考えられる。

茅御堂遺跡では、H第1・第2号住居跡との追求、および第1号集石跡の実測を行なう。出土遺物は、土師器片など980点であった。信濃毎日新聞と毎日新聞が取材に来訪。

11月10日(日) 晴

前日の作業を継続し、太田遺跡では、全遺構の精査と遺物の収容、遺構の実測を完了する。出土遺物は、完形の環などを含む土師器片1,741点であった。

茅御堂遺跡では、第1号集石跡の実測と、検出された第2号集石跡・H第1・2・3・5号住居跡、H第4号竪穴遺構の追求を行ない、H第5号住居跡を残して、精査および遺構の実測を完了する。出土遺物は、土師器片など1,837点におよんだ。

11月11日(月) 晴

発掘作業班と実測・測量班に分れて、前日の作業を継続する。午前中には、太田遺跡の地形測量を含む全調査を終了し、午後は茅御堂遺跡の実測・測量を行ない、夕刻までには、すべての調査を終了し、遺物・器材の収容を行なう。出土遺物は、土師器片など782点であった。

太田遺跡の設定グリッド数は、総数140(560㎡)、これに対して発掘したグリッド数が90(360㎡)、およそ64.3%を発掘したことになる。遺構は神川段丘崖から東方へ26mの中心杭NO132付近から、東へ更に約16mの比較的狭い範囲に集中していた。これは神川東岸の自然堤防状に形成された微高地に、帯状の集落が存在したことを伺わせるものである。この所見は、周辺の土地所有者が、耕作中に発見したといわれる遺物の分布ともほぼ一致している。

茅御堂遺跡の設定グリッド数は、総計98(392㎡)、これに対して発掘したグリッド数が75(300㎡)、およそ76.5%を発掘したことになる。地形と遺構の分布から推考すれば、今回調査した地路は、茅御堂遺跡の南端部で、これより東北方40～50mの畑地付近に、その中心部が所在するものと思われる。この遺跡は、弥生時代から古墳時代に移行する時期の貴重な資料を包蔵し、今後の開発には十分注意しなければならない。

註1 小林幹男 「上田市の原始・古代文化」 昭和49年年 上田市教育委員会

註2 茅御堂遺跡と同期一体の遺跡であり、便宜上茅御堂遺跡にまとめて記述する。

註3 表採された遺物は、弥生後期の節描波状文・縷状文をもつ箱濠水式土器であった。

註4 信濃史料刊行会 「信濃考古秘覽上巻」 昭和31年 信濃史料刊行会

註5 川上 元・小林幹男「長野県小県郡塩田町榎木遺跡緊急調査報告」信濃Ⅲ 22-8

註6 小林幹男・川上 元「西光坊・向田Ⅱ・石原遺跡緊急発掘調査報告」上田市教委

註7 小林幹男他「天神・山田屋敷遺跡緊急発掘調査報告書」昭和50年上田市教委

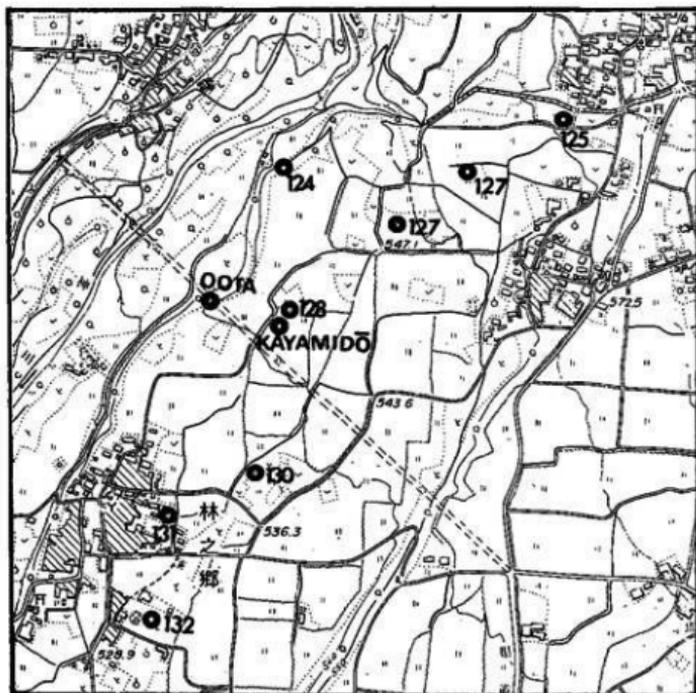
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

太田遺跡と茅御堂遺跡は、上田盆地の東方に位置し、神川扇状地の東部に形成された第2段丘面、いわゆる青木面に立地する。

まず、遺跡の巨視的立地をみるに、上田盆地は、千曲川の北岸に形成された川東平野と、南岸の川西山地に四方を囲まれた盆地性の平野、川西盆地からなり、上田盆地の平坦部は、標高およそ500m以内のそら豆状の湖盆となっている。

両遺跡の立地する川東平野は、千曲川北岸の塩尻の岩鼻から、太郎山・虚空蔵山の南麓



第5図 遺跡の立地条件

(遺跡番号は「上田市の原始・古代文化」によった。)

を通過、殿城山西南麓の瀬沢川に至るほぼ三角形を呈している。この平野は、神川の大扇状地と、千曲川に沿った段丘面、崖下の氾濫原、太郎山南麓の谷口に形成された扇状地からなり、遺跡は多く山麓の扇頂部と扇端部、あるいは河川に沿った段丘面と崖下の氾濫原に集中している。

遺跡の立地する林之郷（太田遺跡）・漆戸（茅御堂遺跡）地籍は、川東平野の東部にあり、付近の地形は、神川扇状地の新町面（第1段丘面）、青木面（第2段丘面）および南方神川沿いの久保林面（第3段丘面）から構成されている。

太田遺跡付近の標高は、およそ540m、茅御堂遺跡付近の標高は、およそ545mである。この扇状地をつくった神川は、四阿山（2,332m）を水源として、多くの支流を合し、東・北信濃の一大動脈である千曲川に注いでいる。しかし、神川は流れが急で、浸食力が大きく、この付近の地質は、神川の運んだ厚い砂礫層を基盤としている。

そして、神川は現在も回春して下刻作用が進み、前述の新町面・青木面・久保林面は、流れがしだいに下刻しながら西偏する過程で形成されたものといわれている。

両遺跡は、この青木面に生産と生活の場を求め、あるいは神川氾濫原の低湿地にもその生産の場を求めて、発展したものであろう。そして、鳥帽子の山脈を背に、南面して肥沃な土地、南方に広がる広大な眺望が、古代人の心を強く捉えて、ここに長い歴史の営みを続けさせたものであろう。

2 歴史的環境

川東平野の遺跡分布を時代別に概観すれば、縄文期の遺跡は、概して山地に近い扇状地の扇頂や扇端部に多く、しだいに河川沿いに下降している。青木面では、中期から後・晩期の遺跡が、北方の堂下・神林に分布し、今回の調査の所見では、茅御堂遺跡付近にも、前期の踏破b・c期の遺跡が包蔵されていることが同われる。

弥生期の遺跡は、太郎山南麓の扇端部付近や神川沿いの段丘面、千曲川沿いの崖下の氾濫原、および第2段丘面に形成された常入付近の微高地上などに多くみられる。

神川沿いの地域に分布する弥生文化は、川西盆地の塩田平・佐久の岩村田付近と並ぶ東信濃の三大中心地の一つである。その分布の中心は、神川東岸の下郷・漆戸・林之郷・杵久保、西岸の上野・古里、千曲川に面した国分・常入付近で、青木面にも、中村・神林・長沢・堂下・西ノ平・茅御堂・境畑・池田・狐塚・下ノ畑など10遺跡が知られている。

古墳時代から歴史時代の平安期末にかけては、灌漑技術の向上による生活面の拡大によって、低地から再び縄文期の遺跡とその周辺にまで、遺跡分布が広がり、密度も急速に大きくなっている。そして、土師器や須恵器を伴う遺跡群の周辺には、終末期の群集墳が各

地に地在している。

青木面の主な遺跡は、中村・神林・長沢・法楽寺・北ノ平・堂下・西ノ平・茅御堂・貝戸・池田・太田・松ノ木など12遺跡であり特に、神川沿いの微高地には、ほとんどくまなく分布することに注目したい。これは神川のつくる氾濫原の低湿地が、生産の場として稲作に利用されていたことを示唆するものではあるまいか。

太田・茅御堂の両遺跡は、前述のとおり、神川にはぐくまれ、発展した遺跡といって過言ではなからう。

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

1 太田遺跡

太田遺跡は、上田市大字林之郷字太田238番地にあり、神川東岸の第2段丘面（青木面）の水田と畑地、およそ3000㎡にわたって分布する土師後期（鬼高期）から晩期Ⅱ期（国分期）の遺跡である。

この遺跡は、神川段丘崖の先端部からおよそ20mほど東に寄った幅約20mの南北に長い帯状の微高地上にあり、比較的狭い地域に複合して、きわめて稠密に分布していることが認められた。

今回の調査は、農道整備事業地域内というきわめて限定された地域内の調査であったが、拡張区を含めて、東西約16m、南北約15mの範囲内に、土師後期（鬼高期）の住居跡4、高床状遺構1、土師晩期Ⅱ期（国分期）の住居跡4を検出し、土師国分期の坏形土器と台付皿形土器などの完形品をはじめ、台付碗形土器や甕形土器などの破片多数と、須恵器の坏形土器・甕形土器・甕形土器などの破片や、灰釉陶器の細頸瓶下腹部など、豊富な遺物を検出した。

(1) 第1号住居跡

A 遺構（第6図）

A-18・19グリッドを中心にして検出された国分期後半の住居跡で、第2・第7号住居跡と複合して、第2号住居跡の南半分と、第7号住居跡の南東隅を切って構築されている。

遺構のプランは、東西径3.45m、南北径3.20mのおよそ隅丸方形で、壁高約24cm、四隅に深さ約15cmの浅い柱穴ピットが認められた。遺構の長径（以下主軸と称する）心線の方位は、NE70°につくられ、北壁ほぼ中央に焼土が認められた。

完形の坏形土器などを含む出土遺物は、南西隅に集中して検出されたが、この部分にもかなりの焼土が検出され、また、南壁寄り中央部分にも焼土が認められた。これら2箇所の焼土は、その位置関係から、複合するH 2住居跡（中央焼土）とH 7住居跡（南西隅焼土）に関係するものと考えられる。遺構の床面は、前記2遺構の床面レベルと僅かな差で複合し踏み固められ、およそ水平につくられていた。

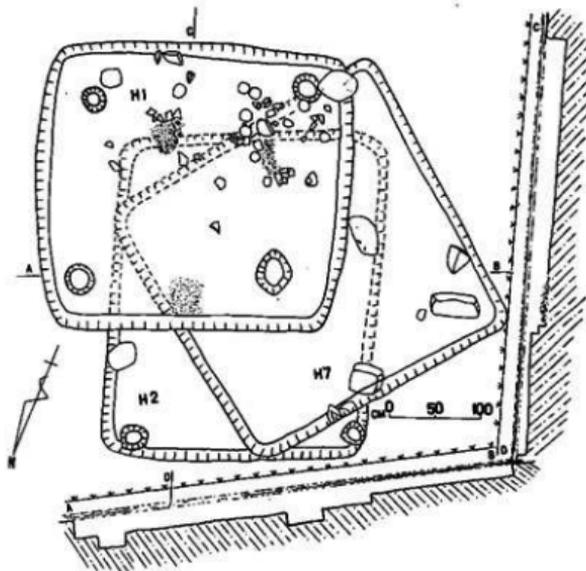
B 出土遺物（第7・8・9図）

本住居跡から検出された出土遺物は、土師器の坏形土器・台付皿形土器・台付碗形土器・甕形土器・広口壺形土器と灰釉陶器の長頸瓶破片などで、坏形土器が多いこと、須恵器がきわめて少なく、いずれも小破片で、器形を復元できるものが全くないことが特色である。

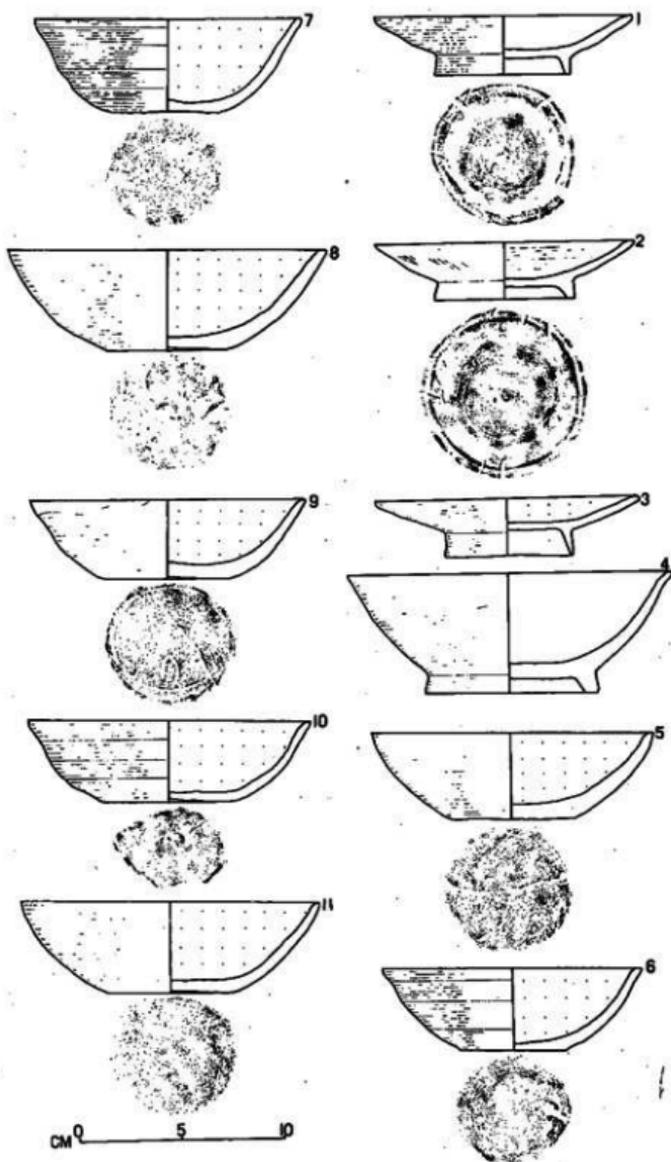
a 土師器

(i) 台付皿形土器（第7図1～3）

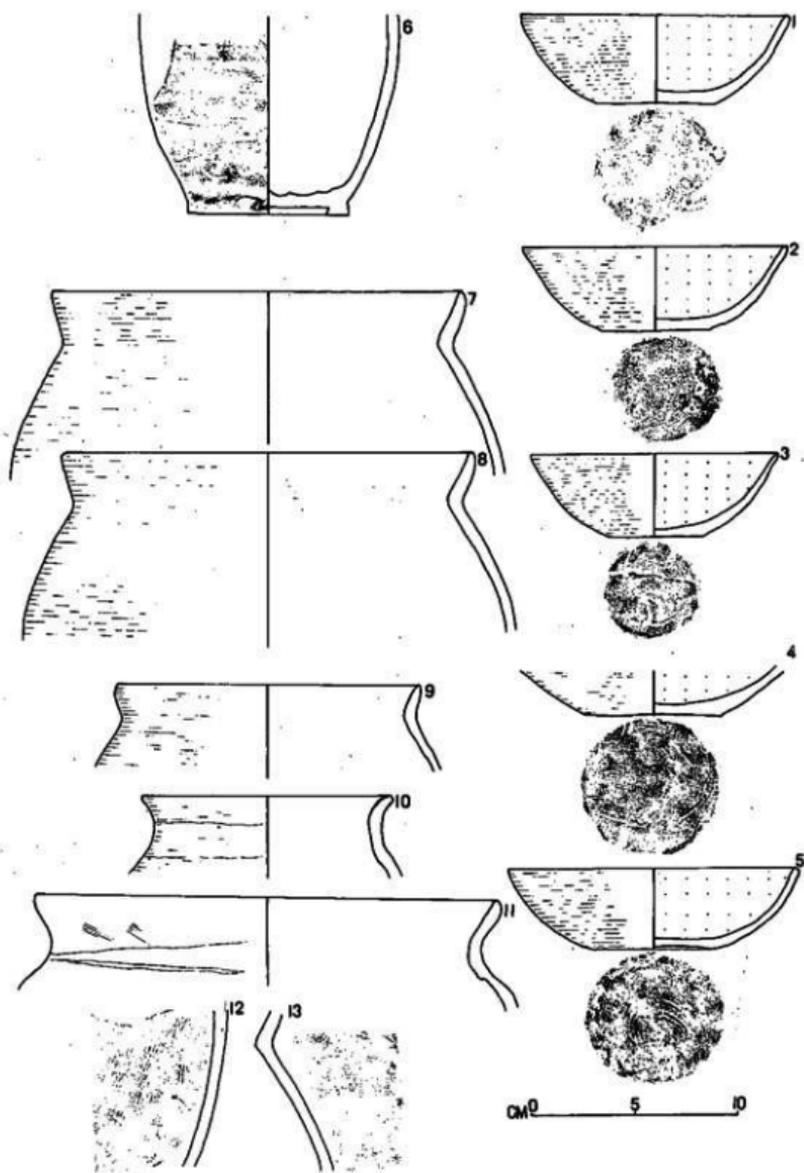
この器形の土器は、口辺部が直斜状のものと（1・3）、わずかに内弯するもの（2）



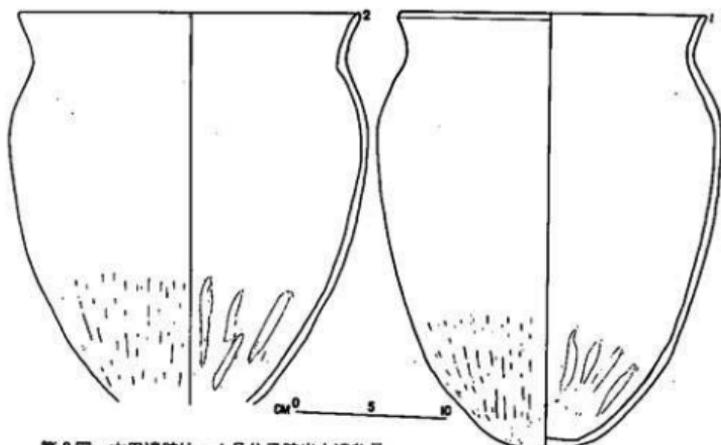
第6図 太田道跡H-1・2・7号住居跡実測図



第7図 太田遺跡H-1号住居跡出土遺物実測図 I



第8图 太田遺跡H-1号住居跡出土遺物実測図Ⅱ



第9図 太田道跡H-1号住居跡出土遺物Ⅲ

があり、器台はいずれも断面梯形を呈するが、坏部の浅いものは(3)、器台が高くつくられ、全体のバランスをとっている。

器面は淡茶色、あるいは淡橙色を呈し、ロクロ状の擦痕が残り、底部は糸切りの後に台部を接着して整形されている。内面は淡茶色を呈するものと(1・2)、黒磨(3)の2手法が認められる。

なお、各部位の計測値、および比は下表のとおりである。(単位cm)

図-NO	口径A	器高B	底部径C	$\frac{A}{B}$	$\frac{A}{C}$	$\frac{C}{B}$	特色
7-1	12.5	2.8	6.6	4.46	1.89	2.35	糸切底
2	12.6	2.8	6.8	4.5	1.85	2.42	糸切底
3	12.8	2.9	6.2	4.41	2.06	2.13	内黒糸切底

この表によれば、口径と器高の計測値がきわめて近似値を示し、従って同比も1:4・41から1:4・5と器形上の類似を示唆している。

(c) 台付壙形土器(第7図4)

器形が明らかなものは、この1例のみで、他はいずれも小破片である。

口縁は唇状外反りで、口径15.6cm、器高5.9cm、胴部がゆるやかにカーブし、橙褐色を呈し、底部は糸切りの後に断面梯形の台部を接着し、径8.2cmである。

(d) 坏形土器(第7図5-11、第8図1-5)

まず、各部位の計測値と比を表示し、略述することにした。(単位cm)

図一№	口径A	器高B	底部径C	$\frac{A}{B}$	$\frac{A}{C}$	$\frac{C}{B}$	特 色
7-5	13.6	4.2	5.8	3.23	2.34	1.38	糸切底・内黒
	12.6	4.0	5.2	3.15	2.42	1.30	糸切底・内黒
7	13.0	.5	5.3	2.88	2.45	1.17	糸切底・内黒
8	15.4	4.8	5.8	3.20	2.65	1.20	糸切底・内黒
9	13.8	4.0	5.8	3.45	2.37	1.45	糸切底・内黒
10	13.6	4.0	6.6	3.4	2.06	1.65	糸切底・内黒
11	14.4	4.5	5.8	3.20	2.48	1.28	糸切底・内黒
8-1	13.0	4.1	5.8	3.17	2.24	1.41	糸切底・内黒
2	12.8	4.0	5.2	3.20	2.46	1.30	糸切底・内黒
3	12.0	4.0	4.6	3.00	2.60	1.15	糸切底・内黒
4	—	—	6.6	—	—	—	ヘラ起し・ハケ・内黒
5	14.1	4.0	6.0	3.52	2.35	1.50	糸切底・内黒

上表によれば、器形全体の統一性はうかがわれないが、底部径と器高に計測値の共通するものが多いことに気づく。器高では 4.0cm 5例、4.5cm 2例、4.1cm も 4.0cm の近似値と考えれば、半数が同値となる。また、底部径でも、5.8cm が 5例、5.2cm と 6.6cm が各 2例である。口径の数値にややバラつきがあるのは、口縁の成形からくるもの、すなわち内弯形と外反り形の影響であろうか。

口縁部には、丸味のある唇状とやや尖る嘴状、さらに内弯・外反り、直斜状などの器形がみられる。さらに、内弯形には厚手と薄手、外反り形には、反りの強いものと弱いものなどの器形に分類できる。胴部は茶褐色、あるいは淡茶色、橙色などを呈し、ロクロ状擦痕が認められ、内面はいずれも黒磨により、底部は第 8 図 4 を除いて、糸切り手法が行なわれている。底部の器形も上げ底が一般的である。

(二) 甕形土器 (第 8 図)

いずれも大型粗製で茶褐色を呈し、内面にかなりの有機物が付着し、外面底部は、煮炊に伴う酸化、および煙による黒斑が認められる。

口縁は外反りで、頸部で「く」の字形をつくり、わずかに肩部がみとめられ、上胴がゆるく張って、しだいに底部に向かって縮約している。下胴は粗いハケ状の工具で整形し、内

面はヘラ削り痕を残している。

薄手で1は口径20.5cm、器高28.8cm底部径 3.8cmである。

(4) 広口壺形土器 (第8図7-11)

いずれも口辺部の破片で、器形全体を伺うものはない。この器形は、甕形土器より頸部のくびれが強く、上胴が張っているのが特色である。この器形に類似する須恵器がみられるので、その模倣と考えられる。

b 灰釉陶器 (第8図6)

長頸瓶の下胴部が1点検出されている。口辺、および上胴部の形状は明らかでないが、下胴はやわらかいふくらみがあり、器台は断面方形を呈する。胎土は灰白色を呈する良質の陶土を用い、釉は淡緑色系である。これらを総合すると、11世紀後半の0-53期に尾北窯で生産されたものと考えられよう。

(2) 第2号住居跡

A 遺構 (第6図)

A・A'-17・18グリッドを中心に検出された区分期の遺構である。南半分をH1号住居跡によって切られ、また、H7号住居跡の東北部分半分を切ってつくられている。

遺構のプランは、南北径3.60m、東西径2.95mの隅丸長方形で、主軸方位はNW18°である。壁高はおおよそ10cmを計るが、地表からわずか22cmに壁上面があり、全体に耕作による削平が考えられる。

柱穴ピットは、北壁東西隅の2個を検出したが、複合する南壁側のピットは確認できなかった。かまど跡と推定される焼土は、南壁中央部と南東隅寄りに検出されたが、位置関係からは、中央部の可能性が最も強く、その後H1号住居跡もこの場所を利用した可能性がある。

B 出土遺物 (第10図)

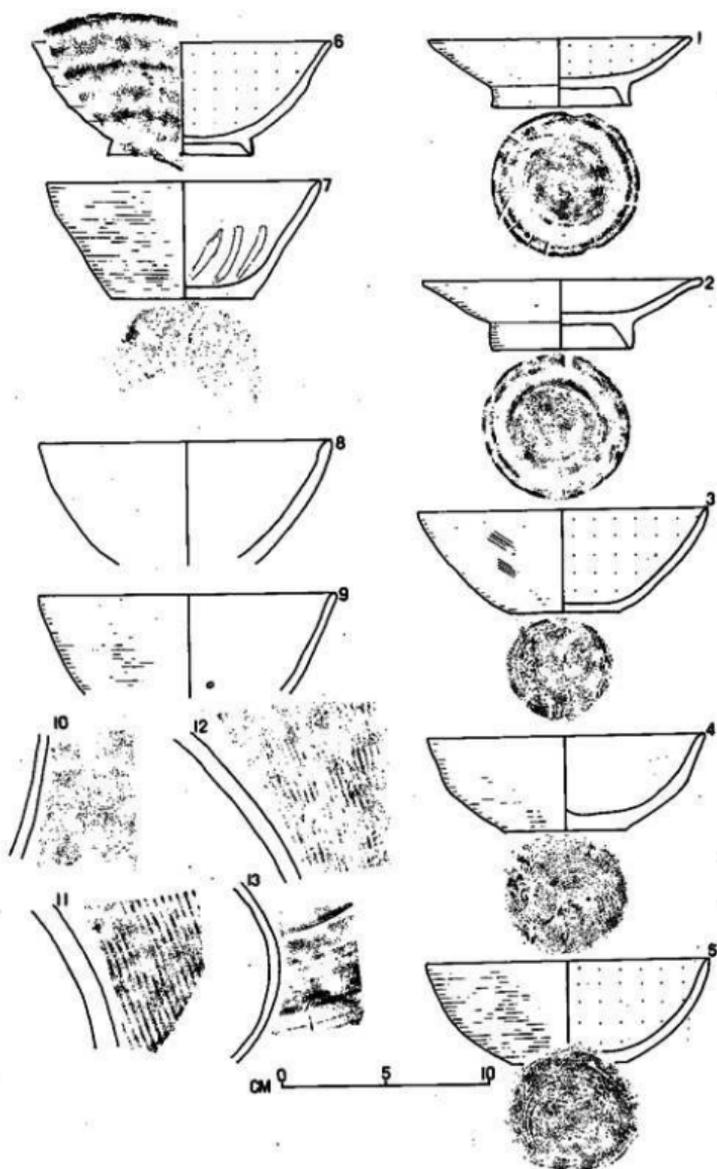
土師器の台付皿形土器・坏形土器、須恵器の甕形土器片、灰釉陶器の長頸瓶破片などが検出されている。

a 土師器

(i) 台付皿形土器 (第10図1・2)

この器形の土器は、二つのタイプがある。一のタイプは、やや内湾気味の口縁部から、わずかに胴部でふくらみをもち、器台は裾部で外反りする断面台形を呈するもので、内面黒磨、底部は糸切りの後に器台を接着している。(第10図1)

二のタイプは、弱い外反り唇状の口縁から、ほぼ直斜状の胴部を描き、器台は裾部で内湾気味の断面台形を呈するものである。(第10図2)



第10图 太田遺跡H-2号住居跡出土遺物

図一No.	口径A	器高B	底部径C	$\frac{A}{B}$	$\frac{A}{C}$	$\frac{C}{B}$	特 色
10-1	12.8	3.3	6.8	3.87	1.88	2.06	糸切底・内黒
2	13.6	3.4	6.8	4.0	2.0	2.0	糸切底

(c) 坏形土器 (第10図3-5・7・8)

この器形の土器には、口縁が内寄するもの(3-5・8)と、直斜状のもの(7)の二つのタイプがあり、前者はさらに、胴部がほぼ直斜状のもの(3)、中胴が張るもの(4)、ゆるやかなふくらみをもつもの(5・8)の3種類に分類することができる。底部はいずれも糸切り底であるが、さらに内面黒磨によるもの(3・5)と、茶または橙褐色を呈するもの(4・7・8)があり、器面はロクロ状の擦痕が認められる。

図一No.	口径A	器高B	底部径C	$\frac{A}{B}$	$\frac{A}{C}$	$\frac{C}{B}$	特 色
4	14.0	4.9	5.1	2.85	2.74	1.04	糸切底・内黒
4	13.4	4.6	5.8	2.91	2.31	1.26	糸切底
5	13.6	5.0	5.3	2.72	2.56	1.06	糸切底
7	13.3	5.6	7.0	2.37	1.9	1.25	糸切底
8	14.8	—	—	—	—	—	

(d) 台付土器 (第10図6)

口縁はゆるい外反り唇状を呈し、下胴がやわらかいふくらみをもつ。器台は断面梯形である。器面は茶褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残り、内面は黒磨されている。H第1号住居跡出土のもの(第7図4)より概して薄く、器台の裾部が喇叭状に尖っている。

b 須恵器 (第10図9-11)

検出された須恵器は、坏および甕形土器の破片で、いずれも器形が判然としない。

(i) 坏形土器 (第10図9)

唇状内寄気味の口縁から、胴部でわずかにカーブしている。器面はロクロ状の擦痕がよく残り、青褐色を呈している。

(ii) 甕形土器 (第10図10-12)

いずれも小破片で、10は薄手小型のものと考えられ、器面に格子目の文様がある。11は、タタキ目のある大型の土器と考えられる。

c 灰釉陶器 (第10図13)

長頸瓶の胴部と推考される破片で、胴部の張りが強く、10世紀前半のK-78期に比定されるものであろうか。

(3) 第3号住居跡

A 遺構 (第11図)

C・D-19~21グリッドに検出された鬼高期の遺構である。遺構の南東部は、氾濫による土砂・礫の流入によって、一部破壊されているが、大部分は良好に遺存していた。

遺構のプランは、南北径4.10m、東西径3.80mの隅丸長方形で、壁高約25cm、四隅に径およそ25cm、深さ15cm~30cmの柱穴が認められた。かまど跡は明確でなく、中央東壁寄りに、かなりの焼土層を認めたが、これは位置から推考すれば、北側で切っているH第4号住居跡のかまど跡とする公算も強く、氾濫により崩壊した南、あるいは東壁部分にこの住居跡のかまどは所在したのかも知れない。

B 出土遺物 (第12図1)

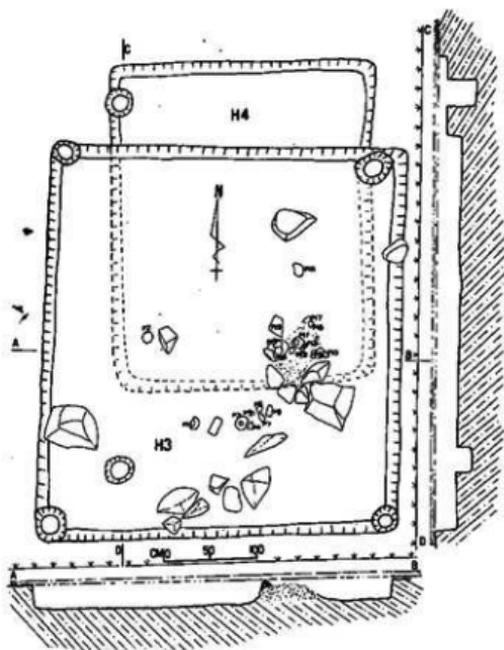
完形できるものは、坏1点だけであるが、他に坏・甕形土器の小破片が、焼土の周辺から多量に検出されている。

環形土器は、外反り喇叭状の口縁から、頸部で「く」の字形にカーブし、やわらかいふくらみをつくって、丸底の底部に続いている。器面は淡茶褐色を呈し、つやがあり、内面ともへら磨されている。

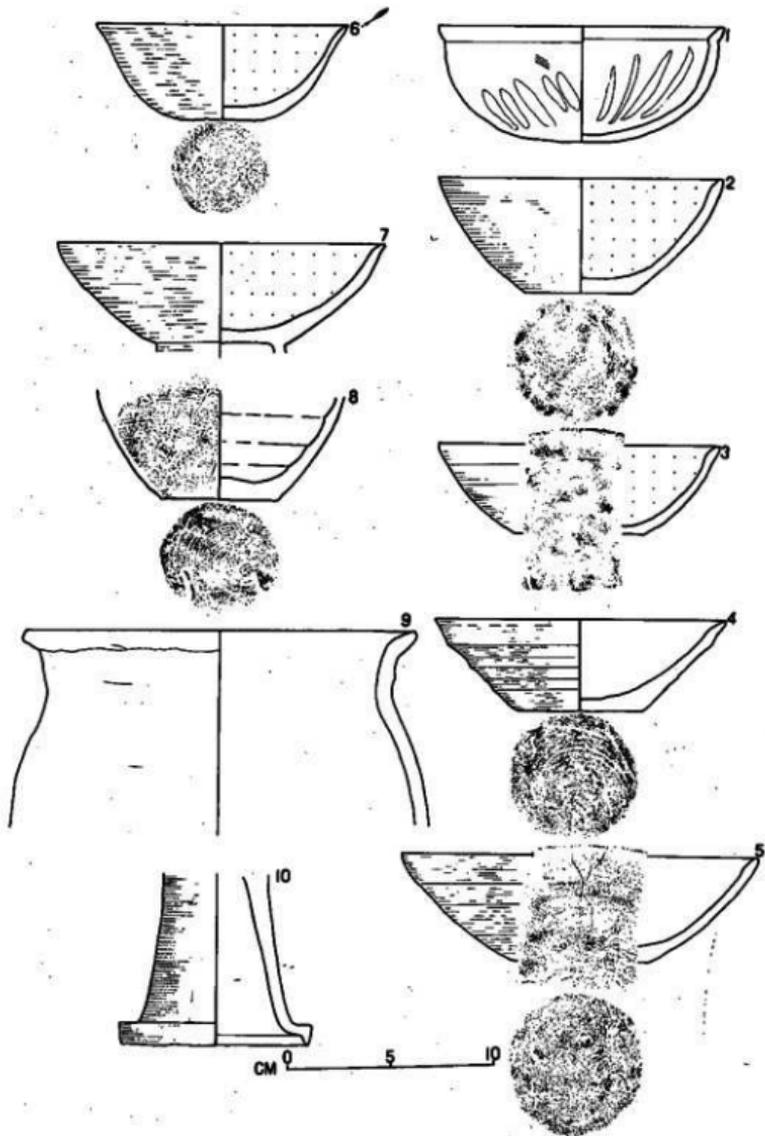
(4) 第4号住居跡

A 遺構 (第11図)

D-1グリッドを中心にして検出された遺構で、南側の大部分をH第3号住居跡によ



第11図 H-3・4号住居跡実測図



第12図 太田遺跡H-3・5・7号住居跡出土遺物実測図

って切断されている。

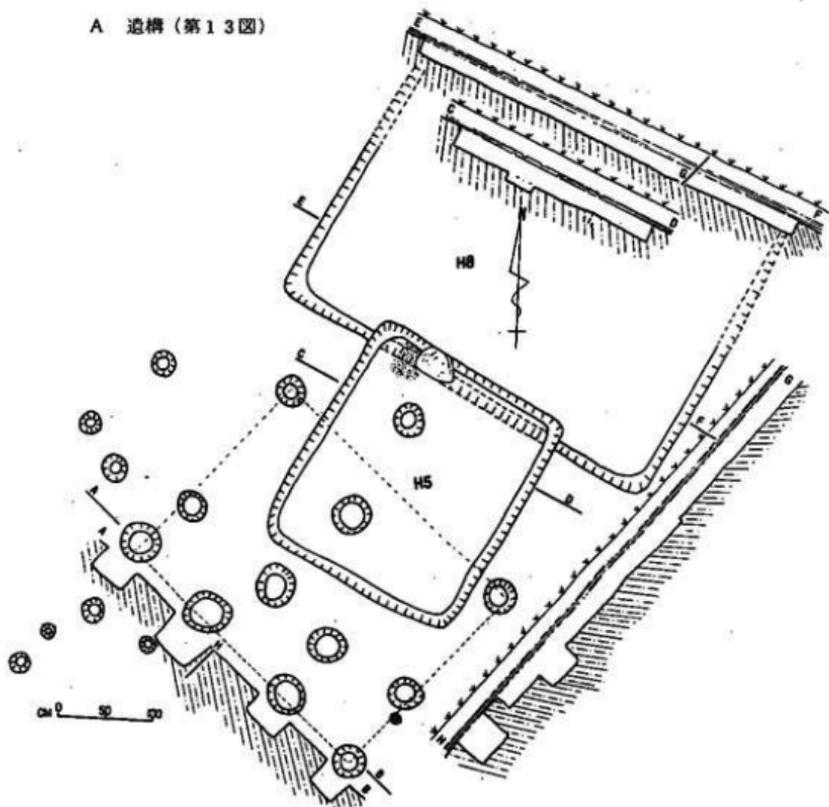
遺構のプランは、南北径3.46m、東西径2.8mの隅丸長方形と考えられる。

B 出土遺物

環形土器の小破片などが微量検出されている。しかし、いずれも器形を復元して検討できるものはなく、わずかな資料によって結論を急ぐのは、やや危険でもあるが、H第3号住居跡の時期と大差のない鬼高期のものと考えられる。

(5) 第5号住居跡

A 遺構 (第13図)



第13図 H-5・8住居跡実測図

D-17・18グリッドを中心にして検出された国分期の遺構である。

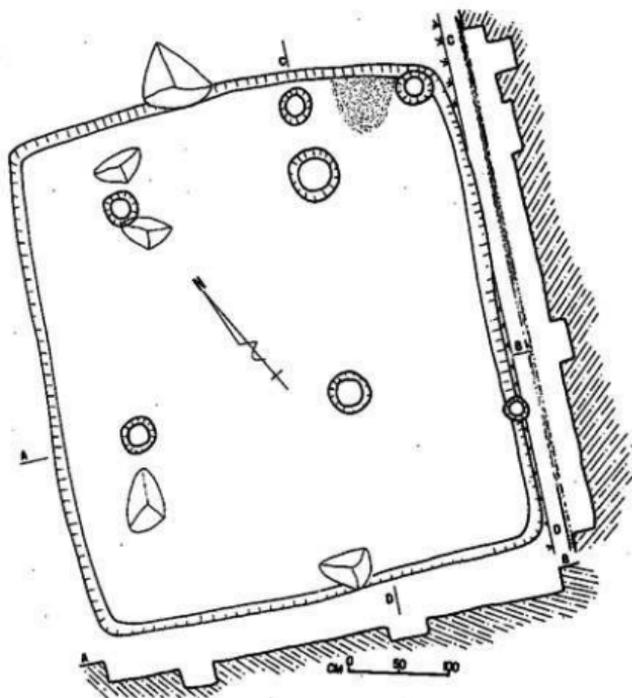
遺構のプランは、南北径2.64m、東西径2.33m、主軸方位がNE30°につくられている隅丸長方形である。壁高およそ20cm、北壁でH第8号住居跡と複合し、これを切っている。かまど跡と推考される焼土層は、北壁西寄りにあり、石組の一部と推定される焼石も残っていた。

B 出土遺物 (第12図2)

完形できるのは、内寄する唇状の口縁から、胴部でややふくらみのあるカーブを描き、糸切り平底につくられた底部をもつ坏形土器1点のみである。

器面は茶褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残り、内面は黒磨である。各部位の計測値は、口径13.9cm、器高5.5cm、底部径5.3cmである。

(6) 第6号住居跡



第14図 太田遺跡H-6号住居跡

A 遺構 (第14図)

B・C-15グリッドを中心に検出された鬼高期の遺構である。

遺構のプランは、南北径5.18m、東西径4.5m、主軸方位がNE35°につくられている隅丸長方形である。遺構の西壁寄りには、礫や土砂が流入して、一部壁面を破壊していた。

壁高はおよそ25cmを計り、北壁東寄りにかまど跡と推考される焼土層があり、柱穴と考えられるピットは、この焼土の両側に2個、中央に4個がほぼ対称的に配されていた。

B 出土遺物

焼土層の前面付近を中心にして、環形土器と甕形土器の小破片が少量検出された。しかし、いずれも小破片のため、器形の全体を知り得ないが、鬼高期に比定されるものと考えられる。

(7) 第7号住居跡

A 遺構 (第6図)

A・A-17・18・19グリッドを中心に検出された国分期の遺構で、東側の大半をH第1号住居跡とH第2号住居跡によって切られている。

遺構のプランは、南北径3.35m、東西径3.38m、主軸方位がNE50°につくられた隅丸長方形である。柱穴は判然としないが、南壁(南東)のほぼ中央にかまど跡と推定される焼土層があり、壁高はおよそ15cmを計測した。

B 出土遺物 (第12図)

土器の環形土器と台付壺形土器・甕形土器、須恵器の環形土器と高環形土器脚部などが、住居跡西側の複合しない覆土、あるいは床面の部分から、比較的多量に検出された。

a 土器 (第12図5~9)

(i) 環形土器 (第12図5・6)

この器形の土器は、やや大型で、唇状のゆるく内弯する口縁から、わずかなふくらみをもつ胴部に続き、底部は糸切り・上げ底につくるものと(5)、やや小型で、嘴状・外反りの口縁から、下胴でやや張り、糸切り・上げ底の底部をつくるもの(6)の2類型がある。

器面はいずれもロクロ状擦痕がよく残り、後者はさらに内面黒磨手法によっている。なお、各部位の計測値、および比は下表のとおりである。便宜上後述の須恵器・環形土器も本表へ含めて登載する。(単位cm)

図一版	口径A	器高B	底部径C	$\frac{A}{B}$	$\frac{A}{C}$	$\frac{C}{B}$	特 色
12-4	14.2	4.4	6.1	3.23	2.32	1.38	須恵器・糸切底
5	17.4	5.1	6.7	3.41	2.6	1.2	糸切底
6	12.2	4.5	4.2	2.71	2.9	0.93	糸切底・内黒

(c) 変形土器 (12図8・9)

9は口径19cm、外反り口縁で、頸部に接着に伴うふくらみが残り、肩からやや丸味のある胴部に続いている。下胴以下は欠損して不明である。

8は灰釉陶器の長頸瓶の下胴にみられるような独特の器形をもち、粗いロクロ状の擦痕が器面に残る。底部は糸切り、平底である。一応変形土器として分類したが、疑問が残る。灰釉陶器の横値による瓶の器形と考えた方が妥当のようにも思われる。

b 須恵器 (第12図4・10)

須恵器には、坏形土器(4)と高坏形土器脚部(10)の完形品のほか、坏や変形土器の小破片が検出されている。後者は大型でタタキ目がある。

(4) 坏形土器 (第12図4)

嘴状でわずかな外反りを示す口縁から、ほぼ直斜状の胴部をつくり、底部は糸切り・平底となっている。器面は青褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残り、三角波状の凸帯がみられる。

(c) 高坏形土器脚部 (第12図10)

胴部はゆるく外反りし、裾部でL字状にカーブし、末端は嘴状に尖り、直立している。胎土は硬く良質で、暗紫色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残っている。

(8) 第8号住居跡 (第13図)

E-16・17・18グリッド拡張区を中心に検出された遺構であり、南壁中央はH第5号住居跡によって切られ、北半部は調査区外に延びている。

遺構の東西径は、4.43mを計るが、南北径は全容を検出していないので、明らかでない。恐らくH第6号住居跡に似る南北径5m前後の隅丸長方形プランであろう。壁高は約15cmで浅く、柱穴・かまど跡は検出されていない。

出土遺物はいずれも小破片で、完形できるものはないが、鬼高期の坏形土器や変形土器の破片が検出されている。

(9) 高床状遺構柱穴群 (第1・13図)

H-3・6・8号住居跡に囲まれたB・C-17・18グリッドを中心に検出された遺

構である。その外縁柱穴の中心線をとれば、東西径3.15m×南北径2.4mの方形プランを呈する高床状の柱六群である。しかし、南側では1列4個のピットが2列、比較的規則正しく配列されていたのに対して、北半のピットは必ずしも明確でなく、高床状の建造物を推考することができるが、さらに検討の要があろう。鬼高期のものと推考される。

2 茅御堂遺跡

茅御堂遺跡は、上田市大字漆戸字茅御堂198番地-4の標高54.5m付近にあり、およそ300.0㎡にわたって、弥生後期の箱清水式土器、土師前期から後期の遺物を出土している。

今回の調査地域は、遺跡の西南端部分にあたるものと推考され、土師五領期の住居跡2、和泉期の住居跡1、五領期と和泉期の集石遺構各1、鬼高期の住居跡1、竪穴遺構1などが検出され、各期の多採遺物が出土した。

(1) 第1号住居跡

A 遺構 (第15図)

B・C-2・3グリッドを中心に検出された五領I期の住居跡である。遺構のプランは、南北径5.25m、東西3.85m、主軸心線の方位がNE35°につくられた隅丸長方形である。壁はやや軟弱であったが、黄褐色の粘土質埴土を掘削ってつくられ、壁高約45cm、南壁やや西寄りに厚い焼土層があり、柱穴は精査したが、ついに検出できなかった。また、住居跡の東壁部分から深く和泉期の第1号集石遺構が複合してつくられ、壁の一部を破壊していた。

B 出土遺物 (第16図)

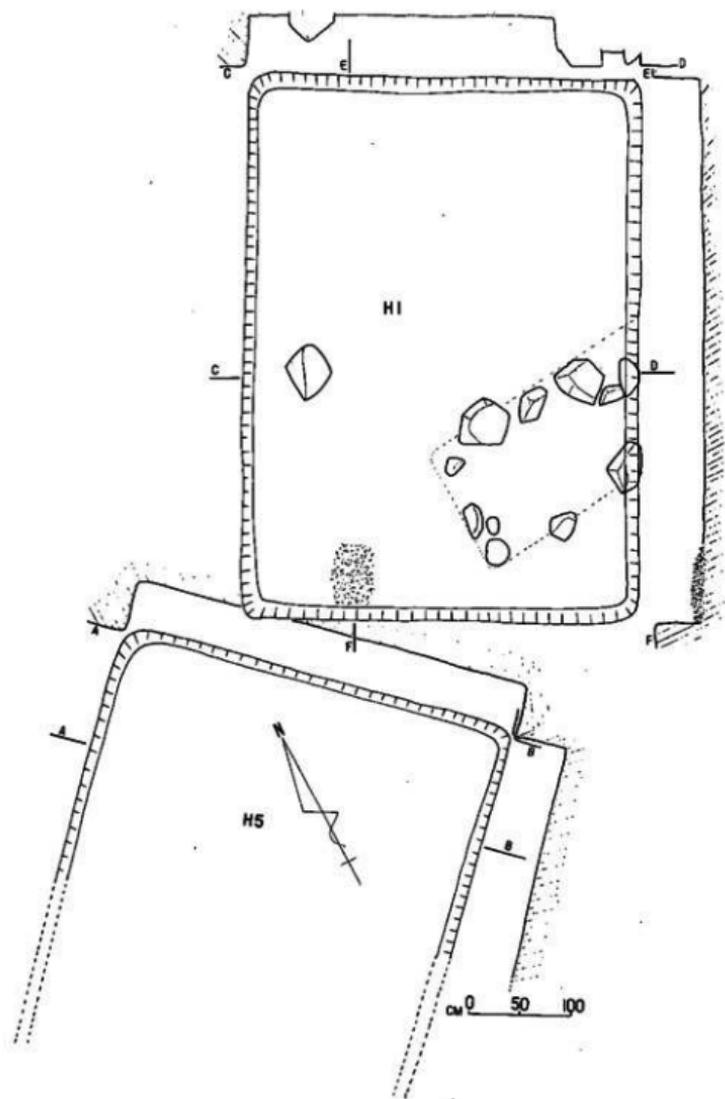
検出された遺物は、いずれも小破片が多く、器形を十分検討し得ないのが残念である。

(i) 高環形土器 (第16図1・3)

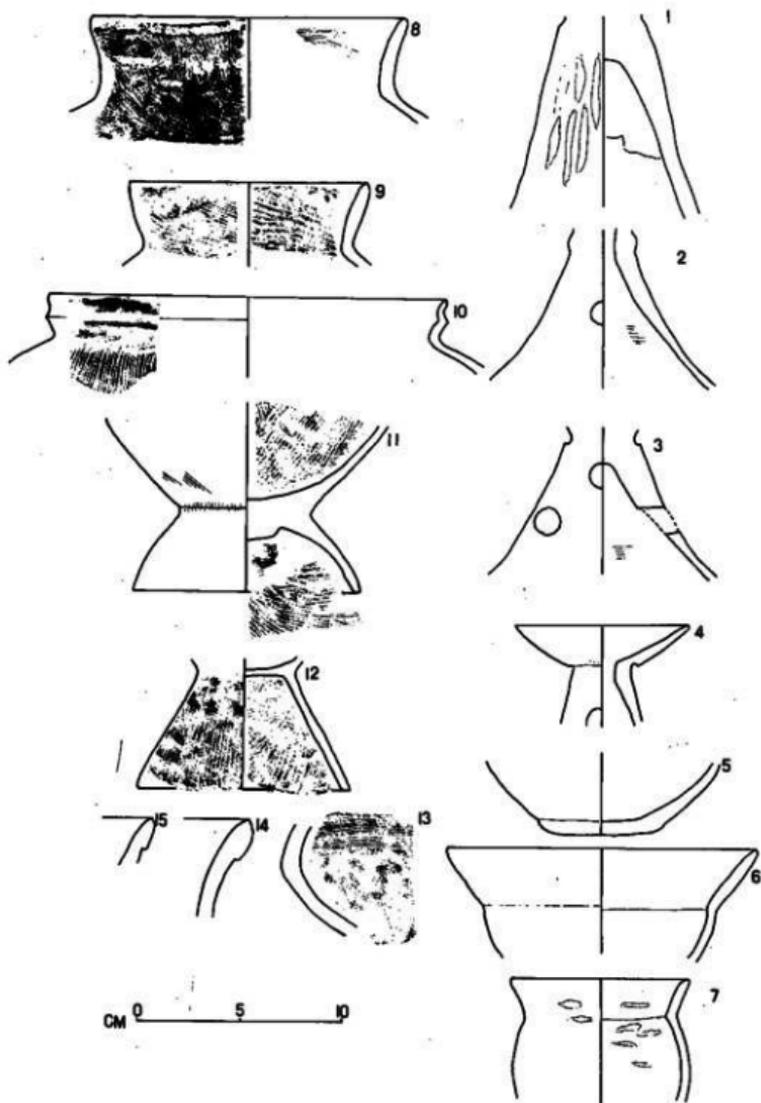
いずれも脚部の破片で、やや直立して胴部にふくらみのある大型の器形(1)と、ラッパ状に裾部が開いて、円形透穴をつくる器形(3)がある。前者は明るい橙褐色、後者は淡い朱色を呈し、後者の透穴は、上下各3個が一定の配列によってつけられている。後者の器形は、概して器台形土器によくみられるものである。

(ii) 器台形土器 (第16図2・4)

2は裾部がラッパ状に大きく開き、4は小型でやや直立し、内弯気味の坏部をのせてい



第15(2) 茅御堂遺跡H-1・5号住居跡実測図



第16图 茅御堂遺 H-1号住居跡出土遺物実測図

る。脚部には、いずれも3個の透穴がつけられ、器面は朱色を呈している。

(イ) 埴形土器(第16図5・6)

口縁は内弯気味に大きく開き、頸部がわずかにくびれてふくらみのある胴部をつくり、底部は丸底である。器面はつやのある淡褐色を呈し、焼成、成形ともによい。

(ニ) 甕形土器(第16図7~10)

7は口径8.7cmの小型な甕形土器で、口縁が外反りし、頸部で「く」の字形にくびれ、ややふくらみのある胴部に続いている。器面は焼成時の煙により、大部分が黒褐色を呈している。

大型の甕形土器は、大きく外反りする口縁部に、いわゆる稜角をもつS字口縁(10)と、稜角のないもの(8・9)の2器形があり、頸部はいずれも強くくびれ、反転して大きく張った丸味のある胴部に続いている。器面は暗褐色を呈し、櫛状の工具で、粗い平行沈線文が右下がりに(8・9)、あるいは下に向けて(10)つけられている。

(ウ) 台付甕形土器(第16図12・13)

いずれも下胴と器台のみで、全体の器形は知り得ない。しかし、前項(ニ)でみた器形と考えると大差あるまい。

器台部の器形は、逆埴形状を呈するものと(11)、断面梯形状のもの(12)の2器形があり、いずれも櫛目状の平行沈線文が内外面につけられている。11の器台は、高坏の脚部接着法にみられる手法が用いられ、12は器台のみを後から接着している。

(ハ) 壺形土器(第16図14・15)

いずれも口縁部の小破片であるが、東京の船田遺跡出土の器形に類似している。口縁部は、蛇頭状を呈し、胎土を成形時に折り返してつけた段落をもつのが特色である。器面は暗褐色を呈し、櫛目状の沈線文が下方に向けてつけられ、口辺部は強く外反りしている。

(ヒ) 弥生式土器(第16図13)

箱濠水Ⅱ式の壺形土器破片と櫛楯波状文をもつ甕形土器の小破片が検出されている。

壺形土器は、赤色塗採があり、頸部に縦綫の粗い櫛楯波状文がつけられている。

(2) 第2号住居跡

A 遺構(第17図)

A・B-6~8グリッドを中心にして検出された和泉期の住居跡である。遺構のプランは、南北径4.47m、東西径3.82mを計る隅丸長方形である。

主軸心線の方位は、NW60°につくられ、壁高はおよそ18cm、四隅と北壁、および東壁の中央に各1個、計6個の柱穴が検出され、かまど跡と考えられる焼土層が、南壁中

中央にかなり広範に認められた。床面は水平で、堅く踏みしめられていた。

B 出土遺跡（第18図1～4）

(i) 高坏形土器（第18図2～4）

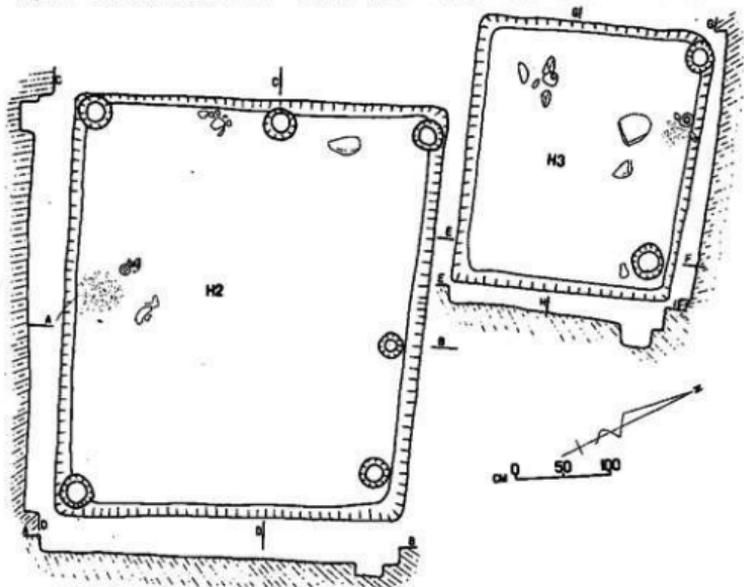
坏部と脚部が別個体として検出され、完形できるものはない。

坏部は口径16.5cm、嘴状でわずかに内寄する口縁部から、外傾直斜状の胴部をつくり、下胴でわずかに張り、底部は弱い丸底となって、接着部の突起を中央につけている。器面は明るい橙褐色を呈し、ヘラ磨とハケ調整を併用してつくっている。

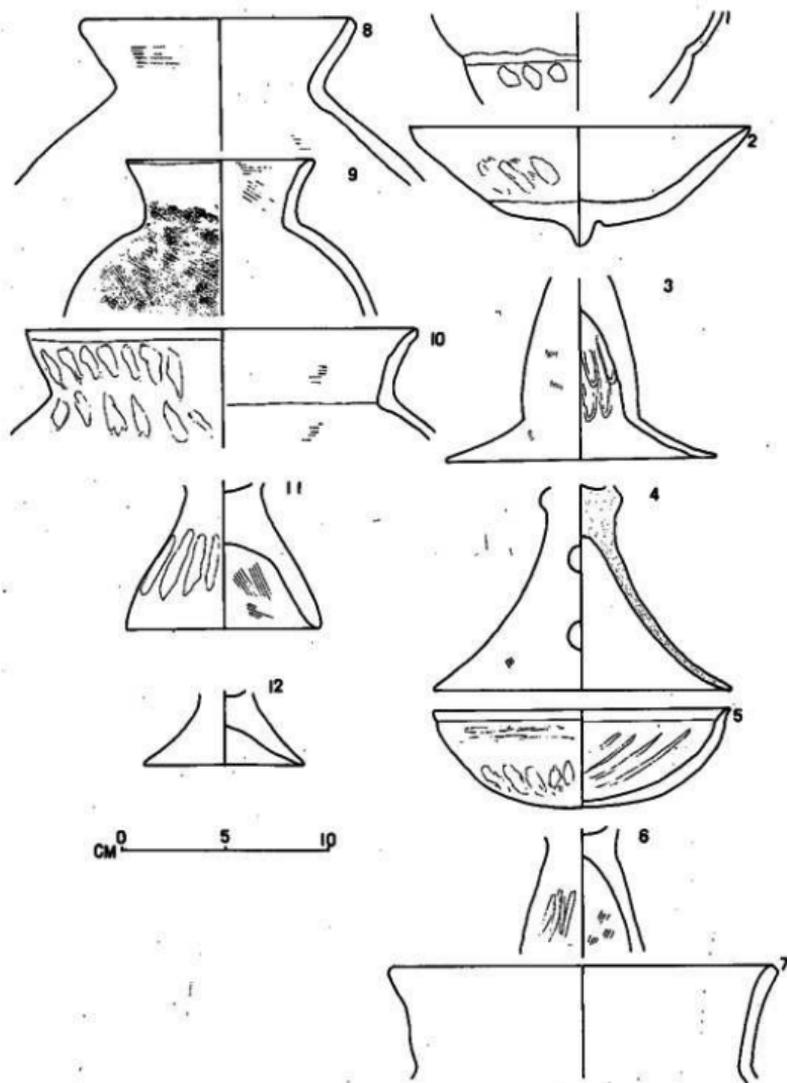
脚部は、わずかなふくらみカーブを描いて直立する胴部から、裾部で大きく反り気味にラッパ状に開くものと（3）、五領期の脚部に酷似する器形（4）の2類型が検出されている。後者は脚部全体が深いラッパ状に開口し、上下2段に計6個の透穴がつけられている。

脚部に透穴をつける手法は、和泉期にも諏訪市の茶臼山遺跡などに、2・3の例はあるが、器形は全く異なり、また、器形だけとれば、下伊那の山岸遺跡に例をみる五領期の流れをくむ新しいタイプと考えられようか。

器面はいずれも茶褐色を呈し、ハケ調整が行なわれ、3の内面は粗削りにヘラ調整され



第17図 茅御堂遺跡H-2・3号住居跡実測図



第18図 茅御堂遺跡H-2・3・5号住居跡出土遺物実測図

ている。

(c) 埴形土器 (第18図1)

口辺部と底部を欠く破片であるが、およそその器形を知ることができる。口辺部はゆるく内湾し、頸部で弱い「く」の字形にくびれ、わずかに張りのある胴部に続いている。器面は明るい淡茶褐色を呈し、ヘラ磨されている。

(3) 第3号住居跡

A 遺構 (第17図)

B・C-8・9グリッドを中心にして検出された鬼高期の住居跡であり、H2号住居跡とわずかな間隔で隣接している。

遺構のプランは、長径2.87m、短径2.40mの隅丸長方形で、主軸心線の方位がNW70°につくられている。壁高はおよそ15cm、東壁の両側に2個の柱穴があり、これに対応する柱穴を追求したが、検出できなかった。かまど跡と推定される焼土層は、東壁中央やや北寄りに検出され、周辺から環形土器の完形品などが出土している。

B 出土遺物 (第18図5・6・7)

(i) 環形土器 (第18図5)

口縁は嘴状を呈し、口径が14.4cm、外反りして頸部で「く」の字形に弱いカーブを描いて、丸味のある底部に続いている。器面は淡茶褐色を呈し、ヘラ磨され、内面もヘラ研摩によっている。

(ii) 高環形土器 (第18図6)

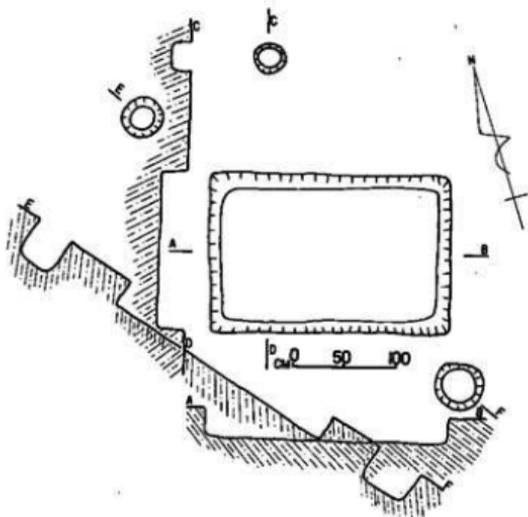
脚部の破片のみで、全体の器形を知ることができない。脚の胴部は、直立形でふくらみがある。器面は茶褐色を呈し、ヘラ磨され、内面はハケ調整によっている。

(iii) 甕形土器 (第18図7)

大型土器の口辺部破片である。口縁はやや角形に近く、弱く外反りし、頸部で「く」の字形を描いている。

(4) 第4号竪穴遺構 (第19図)

C-12・13グリッドを中心にして検出された小型の竪穴状遺跡である。遺構のプランは、東西径2.36m、南北径1.52mの隅丸長方形で、主軸の方位は、ES20°につくられている。壁高はおよそ27cm、外縁に3個の柱穴状ピットが検出され、覆土から鬼高期の土器片が検出されている。



(5) 第5号住居跡

第19図 茅御堂遺跡H-4号壁穴遺構実測図

A 遺構(第15図)

A-2・3グリッドから南側の調査区域外へのびて検出された五須期の遺構であり、H1号住居跡の南側に、わずかな間隔をおいて隣接している。遺構のプランは、東西径が3.90m、恐らく南北に長い隅丸長方形であろう。壁高約5.0mを計り、床面は堅く、およそ水平であった。

B 出土遺物(第18図8~12)

(イ) 壺形土器(第18図8・9)

いずれも口辺部と上腹部の破片で、全体の器形を知り得ない。

8は口径12.6cm、口辺部は外反りして頸部が「く」の字形にくびれ、胴部は球状に張っている。9はやや小型で、口径が9.2cm、器形は8と酷似する。器面は暗茶褐色を呈し、櫛状の工具により、右下がりの平行沈線文がつけられている。

(ロ) 甕形土器(第18図10)

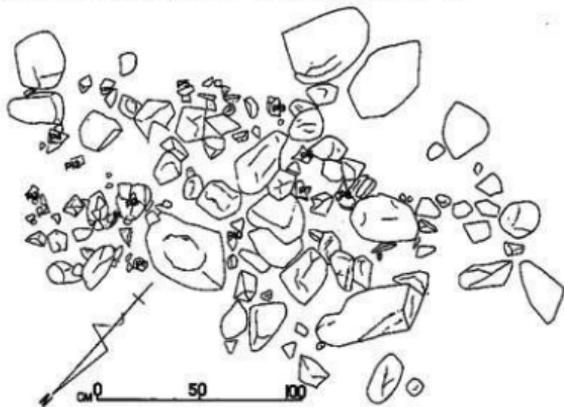
口辺部の破片で、口縁は小さな唇状を呈し、外反りして「く」の字形に屈曲し、張りのある胴部に続いている。器面はヘラ研磨により調整し、暗茶褐色を呈している。

(ハ) 台付甕形土器(第18図11)

検出されたのは、器台部の完形品で、胴部はすべて破片である。器台は裾部に向かって内弯気味に開き、底部径が9.4cmである。器面は茶褐色を呈し、ヘラ研磨によっている。

(ニ) 高坏形土器(第18図12)

小型土器の脚部が検出されている。脚部は裾部がラッパ状に大きく開き、底部径 7.8cm、高さ 3.3cmである。器面は橙褐色を呈し、ハケにより調整されている。



第20図 茅御堂遺跡H-1号遺跡実測図

(6) 第1号集石遺構

A 遺構 (第15・20図)

B・C-1・2グリッドを中心に、およそ逆L字形に野面石が配石され、上面から大量の和泉期の土器が検出された。

遺構の状態は、主軸心線方位を北東40°にして、幅が約160cm、長さが265cmの長方形プランをもって、周辺に角のある大石を横にし、あるいは立てて配し、中に雑然と大小の自然石を集石している。

また、この主体部とおよそ直角に、H1号住居跡に複合した同様な配石が認められた。

この遺構がなにを意味するものか、十分解明されていないが、断面によって追求しても、土壇状のものでないことは明らかである。

B 出土遺物 (第21・22図)

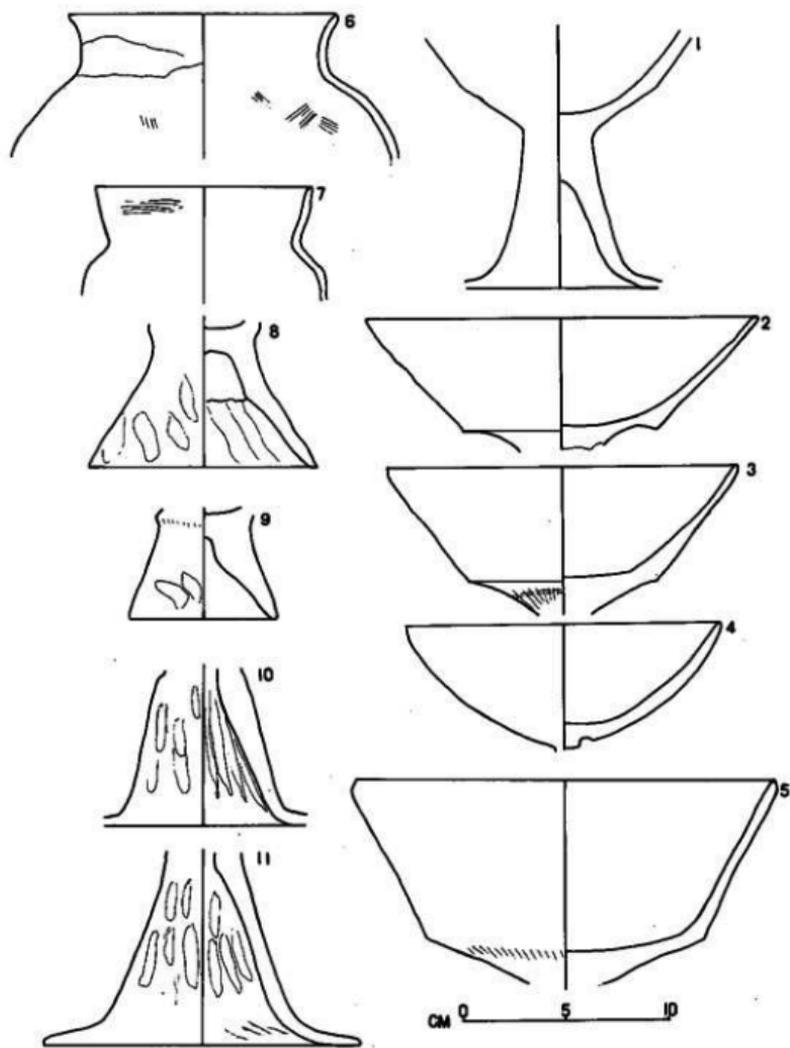
この遺構から検出された遺物は、高環形土器と壺形土器・台付壺形土器などである。特に、高環形土器の出土量がきわめて多く、また器形が多様であることも注目に値しよう。

(4) 高環形土器 (第21図1～5・10・11・第22図1・2)

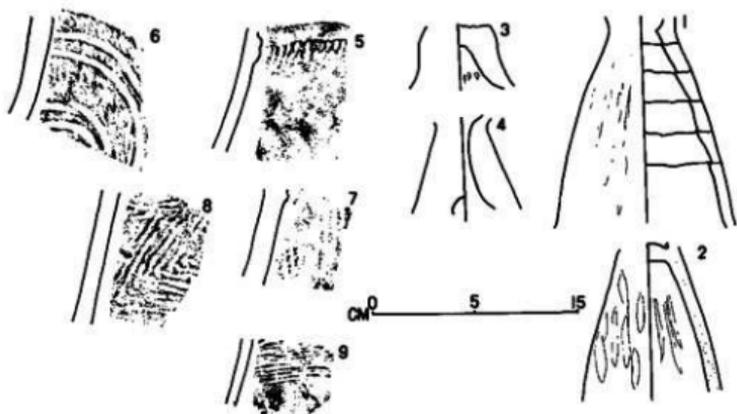
坏部、あるいは脚部のみで、一団体が完形できるものは検出されていない。

検出された坏部は、いずれも器形を異にし、大別して2類型となる。

1のタイプは、下脛に稜角をもち、口辺部が外反り型(3・5)と直斜状型(2)になる。そして、坏部の稜角の部位も、中脛に近い部分にあるもの(1・5)と、底部に接する部分にあるもの(2・3)がある。また、器高に対する口径の比(深さ)も、(2)の



第21圖 茅岡堂遺跡H-1号集石遺構出土遺物実測圖



1 : 3 (最も浅い型) から、(5) の 1 : 2 (最も深い型) までさまざまである。

2 のタイプは、口縁部が内弯し、塊状を呈するものである。(4)。

器面の色調も、灰色がかった淡茶褐色(2)・淡茶褐色(4)・茶褐色(1)・橙褐色(5)・淡朱色(3)などがあり、整形はいずれもハケを用いている。

胴部の器形は、胴部が直斜状で、裾部が外反り気味に開くもの(10・11)と高い釣鐘型のもの(1・2)があり、いずれもヘラ研摩している。

(c) 壺形土器(第21図6・7)

6 は口径が 1.3 cm、口辺部は弓なりに外反りし、やや弱い「く」の字形にカーブして、球状の胴部に続いている。

7 は口径が 10.5 cm、口縁部がわずかに内弯して、頸部のカーブが 6 より強く「く」の字形を呈し、胴部は球形と思われる。

いずれも茶褐色を呈し、ハケにより整形し、6 は粗製である。

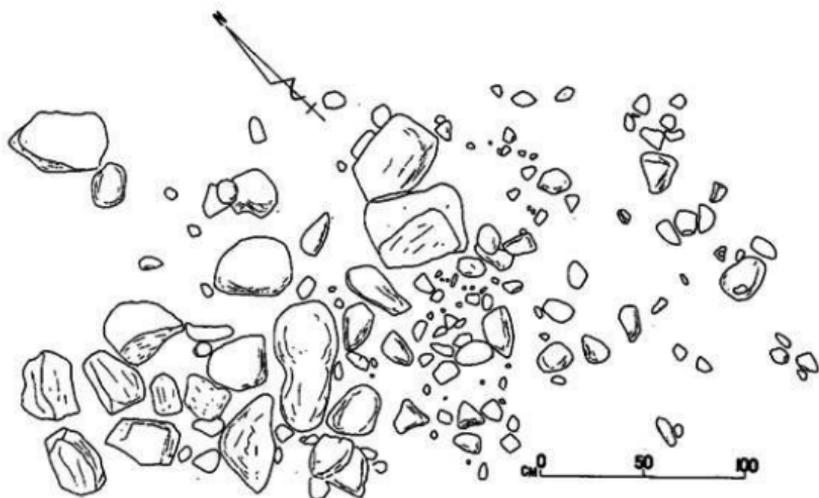
(d) 台付壺形土器(第21図8・9)

いずれも器台部の完形品で、壺の部分は小破片で、復元できない。

器形は裾部がわずかに内弯し、胴部にゆるいふくらみのあるものと(9)、裾部が深いラッパ状にゆるく開き、胴にわずかなふくらみをもつもの(8)がある。いずれもヘラ磨され、8 の器面は暗褐色、9 の器面は淡灰茶褐色を呈している。

(7) 第2号集石遺構(第22・23図)

E-2・3 グリッド拡張区で検出された五領期の遺構である。遺構のプランは、主軸方位を NW 40° にして西端に大石を集め、東端には雑然とやや小さい河原石が置かれている。



この遺跡では、一部で小礫群を伴う地層は認められたが、恐らく神川の河原石と思われる自然石が、これだけ多く集まっているのは、第1号集石遺構とここだけである。そしていづれも高環形土器を主体として、多くの土器類を含むのは、なんらかの意図をもってつくられた遺構と考えてよからう。

この遺構内の出土遺物は、小型の高環形土器脚部（22図3）と器台形土器の脚部で、いずれも裾部を欠いている。高環形土器の脚部は、裾部が大きくラッパ状に開く器形と考えられ、器台形土器の脚部は、やや深いラッパ形で、3個の透穴がつけられている。

(8) その他の出土遺物

(i) 石製有孔円板（図版16）

C-9グリッドのH4号竪穴遺構脇から、絹雲母片岩の石製有孔円板1個が検出されている。出土位置からみると、H第4号竪穴遺構に伴う鬼高期の可能性が強い。しかし、単独出土しているので確認に欠ける。

径2.8cmの円板に1.3mmの孔を2個所併列してあけている。

(ii) 前期縄文式土器（第22図）

諸磯b・c期に比定される土器片が、グリッド、および遺構内から微量検出されている。この付近に、あるいはこの遺跡の一部に複合して、この期の遺跡のあることが推考される。

第Ⅳ章 考 察

1 太田遺跡

(1) 立地条件と各期の遺構

今回のきわめて限られた発掘地点からの所見によれば、太田遺跡の範囲は、表採された遺物の分布範囲より狭く、最大にみて神川段丘崖の末端から東へおよそ50mの幅で、南北に長く帯状に形成されているものと推考される。因に、今回検出された遺構は、グリッド14から21の範囲に極限され、グリッド1付近からも、若干の大型遺物を検出している。

地層のプロファイルによれば、グリッド1の段丘崖末端部から10付近までは、比較的礫群の散布が少なく、10の東から15付近、21から24付近の2個所に、大量の礫が認められ、H3号住居跡の東側と、H6号住居跡の西側は、これらの礫群の浸入によって、壁の一部が削られている。そして、礫群に砂が混じり、明らかに氾濫の影響とみられたのは、H3号住居跡の東側部分であった。

この地域の微地形は、その後水田化のために削平され、一部の礫群が撤去されているので、現在十分な検討を加えることは不可能であるが、遺構群の所在するグリッド12付近から23付近の幅に、自然堤防上の南北に長い微高地があり、ここが集落の立地として選ばれたものと考えられる。

この付近の段丘崖は、かなりの規模で半円状にえぐりとられ、その下の氾濫原が水田化されている。太田遺跡の時期（7世紀後半と9世紀末から11世紀後半までの2期）にも、ここが生産面として利用できる状態にあり、鬼高期より後の8世紀前後ごろ、この地が一時放棄されて、他の集落立地を選び、氾濫の危険が鎮まった9世紀末に、再び生産面として利用されたものであろう。

しかし、この推考のためには、神川の河床が、現在よりかなり高く、大氾濫の折には、自然堤防の周辺にまで、その勢いがおよんだことを意味する。およそ1300年間の神川の浸食が、それほど大きいものであったのか、専門外の筆者には判然とない。ただ、遺跡の所見と変遷から推考を加えた一所見としてご理解いただきたい。各分野の先輩諸賢のご示教を得られれば幸いである。

(2) 遺構と遺物

太田遺跡から検出された遺構は、土師後期（鬼高期）の住居跡4、高床状遺構1、土師晩期Ⅱ期（園分期）の住居跡4である。

各期の遺構の規模・プランを示せば、下表のとおりである。

遺構No.	時期	規模(m)		プラン	主軸方位	かまど跡	特 色
		長径	短径				
H-1	園分期	3.45	3.20	隅丸方形	NE 70°	北壁中央	完形土器多量に出土・灰輪0-53
2	園分期	3.60	2.95	隅丸長方形	NW 18°	南壁中央	完形土器・灰輪K-78期
3	鬼高期	4.10	3.80	隅丸長方形	N 0°	?	礎群により南東部破壊
4	鬼高期	3.46	2.80	隅丸長方形	N 5°	東壁中央	H 3により大部分が切られる
5	園分期	2.64	2.33	隅丸長方形	NE 30°	北壁西寄り	—
6	鬼高期	5.18	4.50	隅丸長方形	NE 35°	北壁東寄り	礎群により西部分破壊
7	園分期	3.38	3.35	隅丸方形	NE 50°	南壁中央	H 1・2により大部分が切られる
8	鬼高期	4.43	—	隅丸長方形	?	?	一部未検出

鬼高期の遺構は、概して園分期のものより規模が大きく、すべて隅丸長方形プランである。しかし、主軸方位・かまどの位置については、特に規則性はみられない。かまど跡の位置は、その遺跡の立地する地域の最多風向と密接な関係があるようである。すなわち、この地域は、西風が多く、従って、西壁部分にかまどを築いた場合は、空気が逆流し、あるいは火の粉が建物に吹きつけて、火災の危険にさらされるためであろう。しかし、具体的な調査例では、ままた例外も認める。

園分期の遺構が、一般的に矮小化する理由は、必ずしも明確ではない。律令体制の農民に対する負担過重が、班田農民を没落させ、貧困化させていくことは、「続日本紀」などの史料によっても明らかであるが、これが直ちに遺構の規模とは結びつかないように思われる。H-1号住居跡のように、規模の小さい遺構の中から、大量の土器類を出土し、また、当時としては高価な灰輪陶器を出土するのは、まさに有力な反証といえる。

太田遺跡は、まず7世紀後半の鬼高期に、文化の黎明を迎えるが、H 3・H 6号住居跡の時代、あるいはその直後に水害を受けて放棄され、再びここに集落が営まれたのは、H 7号住居跡のころであろうか。そして、H 2号住居跡の時期は、20世紀前半のK⁽¹⁾ 78期ごろと推定され、さらに11世紀後半の0-53期ごろにH 1号住居跡が営まれたようである。

国分期の坏形土器の器形の変化は、器高：底部径の比、すなわち一般的には坏の深さが、編年的にしだいに浅く（比が大きくなる）ようになるのである。

因に、H 7号住居跡出土の坏形土器は、0.93→1.2、H 2号住居跡出土の坏形土器は、1.04→1.26、H 1号住居跡出土の坏形土器は、1.15→1.65である。これをMe 1 K ma Iとして、器形の詳細な検討を進めれば、現状における国分期の編年を、もう少し前進させることができるのではあるまいか。

註1 樽崎 彰一 「瓷器の道(1)」名古屋大学文学部二十周年記念論集 1968

2 茅御堂遺跡

(1) 遺跡の立地条件

茅御堂遺跡の立地する地点は、西南方に向って緩傾斜し、今回の調査した地域を西・南限として、そこから平均的に2.5mほど段落している。

太田遺跡の状況から推考して、この下の面が、時には氾濫の危険にさらされたときに、安全で周辺に低湿な生産面をもつこの微高地が、生活面として選ばれ、弥生後期の箱清水期から、土師前・中・後期にわたって、集落を形成し、発展するには、十分な理由があったように思われる。

しかし、急激な神川の浸食に伴って、氾濫の危険はさらに減少したときに、低湿な生産面は乾燥し、巨大な灌漑工事によらなければ、もはや水田稲作は不能の状態となったと思われる。ここに鬼高期から国分期にわたる神川沿岸への進出があったとは考えられないだろうか。

(2) 遺構と遺物

茅御堂遺跡から検出された遺構は、五領期2、和泉期1、鬼高期1の住居跡4と、鬼高期と推定される竪穴遺構1、五領期と和泉期の集石遺構各1などである。

住居跡の規模・プランを集約すれば、下表のとおりである。

遺構No	時期	規模(m)		プラン	主軸方位	かまど跡	記事
		長径	短径				
H-1	五領 I	5.25	3.85	隅丸長方形	NE 35°	南壁西寄り	弥生式土器を伴出
2	和泉	4.47	3.82	隅丸長方形	NW 60°	南壁中央	ユニークな高坏脚部
3	鬼高	2.87	2.40	隅丸長方形	NW 70°	東壁中央	—
4	鬼高?	2.36	1.52	隅丸長方形	ES 20°	—	縁辺から有孔円板
5	五領	—	3.90	隅丸長方形	NE 40°?	—	—

茅御堂遺跡の遺構も、時期による規模・プランの規則性は認められない。しかし、古い時期のものが、概して規模が大きく、かまど跡が西壁を避けているのは、前述と同様な理由によるものと考えられる。

五領Ⅰ式土器が、箱清水Ⅱ式終末の土器と伴出するのは、塩田平の柿木遺跡、西光坊遺跡、天神遺跡の例と同様であり、弥生終末期から五領Ⅰ式期への土器の器形、施文上の変化は、ようやく当地方でも出揃った感がある。さらに、今回の出土資料には、五領Ⅱ式と同器形の高環形土器脚部が、和泉期の土器と伴出して、遺構内から検出されたことが注目される。しかし、五領期の同種土器が、一般的には赤色塗彩をみるのに対して、単に茶褐色の色調をもつものであった点が、新しい土器への変化を示すものであろう。なお、これら当地方の出土土器について、近い時期に集成して検討したいと思っている。

集石遺構は、出土遺物の性格から推考して、祭礼的・呪術的なものであったと考えたい。今後の調査例などをみて、さらに検討したいと思っている。

あとがき

晩秋の11月、脱穀の音を聞きながら、多くの地元の皆さんや大学生・高校生の諸君の協力を得て実施された太田遺跡、および茅御堂遺跡の発掘調査から、早や4ヶ月の月日が流れようとしている。晩秋の紺碧の空に、白雪をいただいた烏帽子岳と紅葉に映えた山脈の美しい景観は、いまや初春の残雪の姿とかわった。

いくつかの遺跡の発掘調査の機会に恵まれ、その度に遺跡に立って、この山脈や流れを眺めて、しみじみと古代の人びとが、なにを考え、なにに共感したのかと思う。それは歴史を学ぶものの果てしない楽しい夢でもある。

今回の調査は、私の知る限り、青木面における最初の学術調査であったと思う。その端緒は、破壊を前提とする記録保存のための緊急調査であり、決して好しいことではない。

しかし、この記録が、この地域の研究にとって、少しでも益するところがあるならば、筆者として、望外の喜びである。

特に土師前期の様相、土師国分期の編年的研究に、新しい資料を加えてくれたことは喜ばしい。一方で東部町常田の城の前遺跡の発掘調査を担当しながら、年度末刊行という時間的制約を受けて執筆した本書は、まさに資料報告の域をでない誠に不本意なものとなった。そして私事にわたるが、上小地方から北信へ転勤という個人的事憎もあって、一層その事態を切迫させた。

いずれ近い時期に、上小地方の古代文化を考古学の立場から再検討し、この頁を果したいと思っている。

ご協力いただいた皆さんのご誠意とご協力に、心から敬意を表し、感謝申し上げて結びとしたい。

昭和50年3月15日 小林幹男



図版1 調査前の太田遺跡全景 (上) 西方より望む (下) 東方より望す



茅御堂遺跡

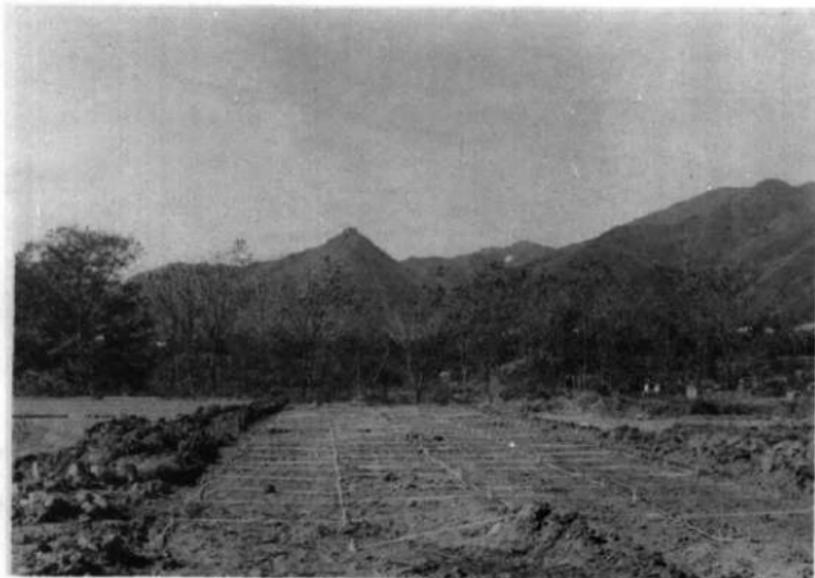


茅御堂遺跡第2号配石址



大田遺跡第1号住居址

図版2 発掘調査風景



図版3 太田遺跡全景（上）調査時東方より写す（下）調査の後深く削られた遺跡



図版4 太田遺跡遺構群 (上) 第3号住居跡東端より西方を望む (下) 第3号住居跡と第4号・第5号住居跡



図版 5 太田遺跡第 1 号住居跡と遺物の出土状態



(上) 遺跡中央の地層断面

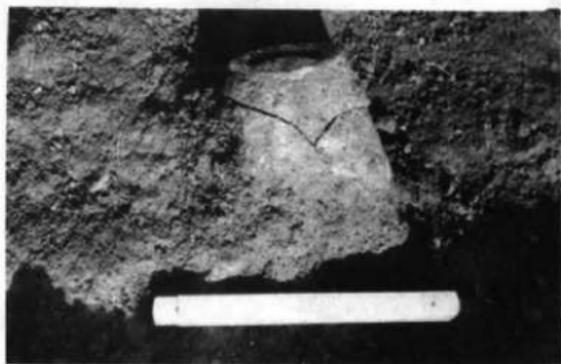


(右) 第3号住居跡



(左) 柱穴群と西北端の遺構

図版6 太田遺跡の地層と遺構



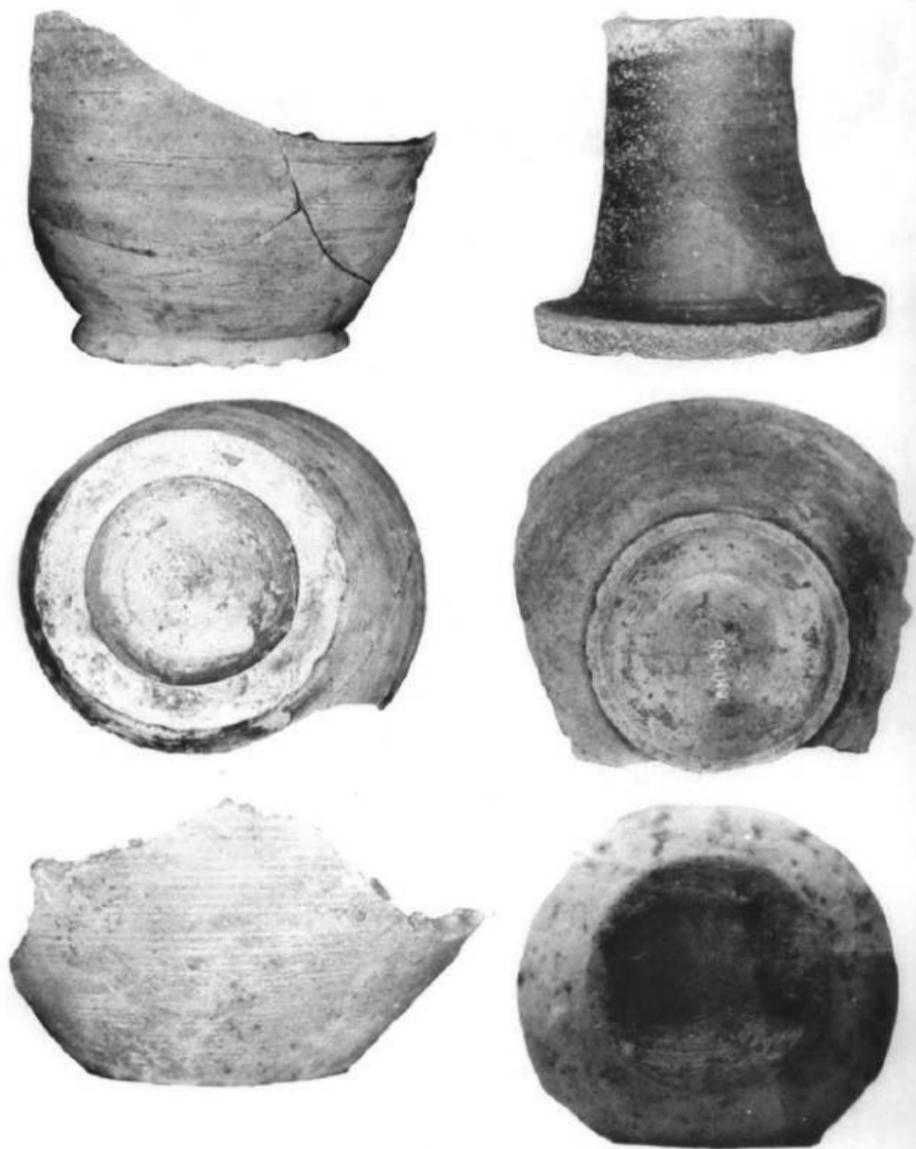
図版7 太田遺跡の遺物出土状態（第1号住居跡）



図版 8 太田遺跡出土遺物 1)



図版 9 大田遺跡出土遺物2)



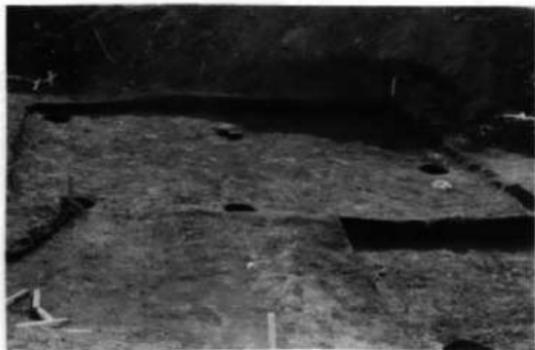
図版10 太田遺跡出土遺物(3)



図版11 茶師堂遺跡全景（上）調査前の遺跡（下）道路工事中の遺跡



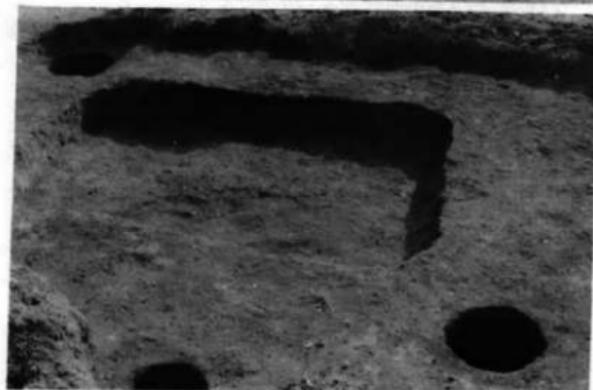
図版12 茅御堂遺跡の遺構群 (上) 遺跡西端部より写す (下) 第1号住居跡と第1号墓石跡



(左) 第2号住居跡と
第3号住居跡 (右下)



(右) 第3号住居跡と
第2号住居跡 (左上)



(左) 第4号遺構

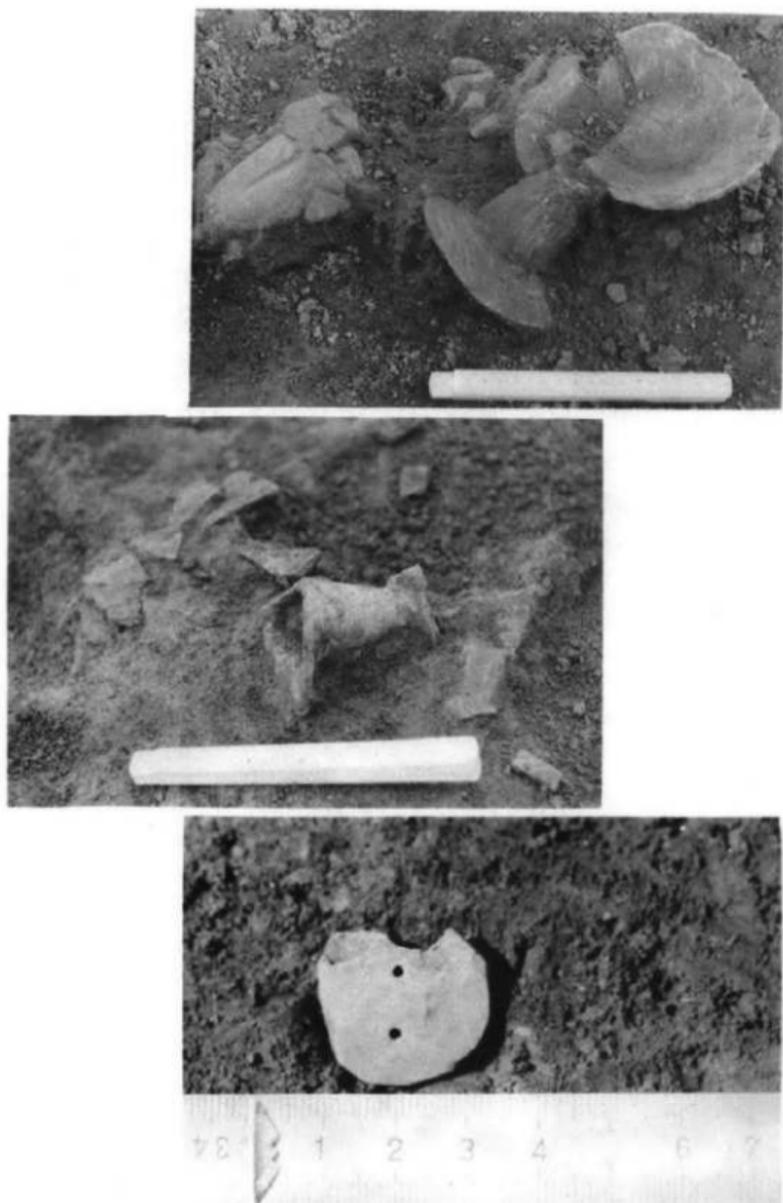
図版13 茶御堂遺跡の遺構



図版14 茅御堂遺跡の基石跡遺構（上）第1号基石跡（下）第2号基石跡



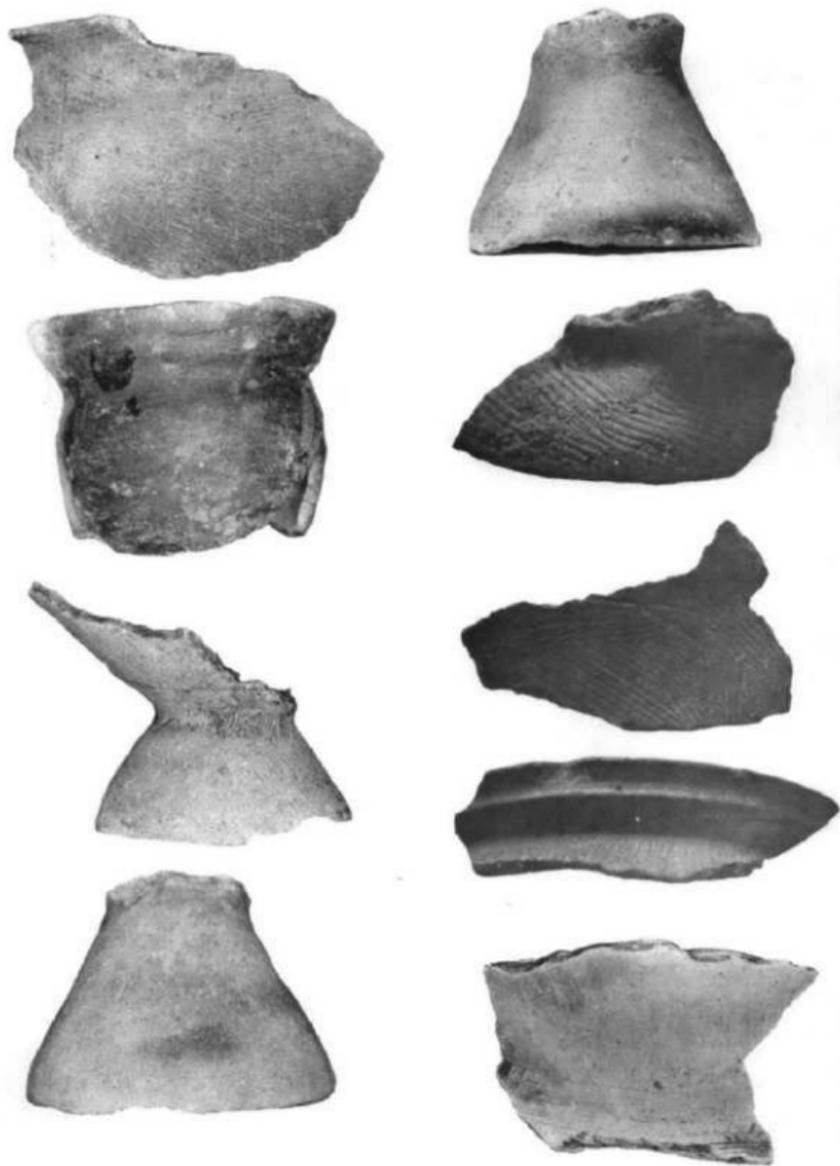
図版15 茶御堂遺跡の遺物出土状態



図版16 茅御堂遺跡の遺物出土状態



图版17 茅御堂遺跡出土遺物(1)



図版18 茅御堂遺跡出土遺物2)

上田市文化財調査報告書 8

太田遺跡 緊急発掘調査報告書
茅御堂遺跡

1975年3月25日 印刷

1975年3月31日 発行

著者 小林 幹 男

発行者 上田市教育委員会
上田市大手1-11-16

印刷所 上田市染谷丘高校下
(有)双葉印刷
TEL. ③1122内



長野県松本市旭3丁目1番1号(〒390)

信州大学文学部

